
Rebellion to Jupiter

茶川竜之介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Rebellion to Jupiter

【NZコード】

N3296Z

【作者名】

茶川竜之介

【あらすじ】

世界は変わり果てた。人、一人一人が目の前に必死にしがみついている。

あるとき、動物は獣へと変わり、人間への反撃を始めた。

人間が取った反撃手段。獣に対抗できる人間兵器を作った…。

実験人間兵器として、戦う一人の少年は生まれたときからある特別なプログラムがあつた。

プロローグ

世界は、変わり果てた。人、一人、一人が目の前の『生きる』と言ふことに必死にしがみついている。

具体的には、世界がどう変わったか・・・。

2350年代。アフリカ大陸で、猿の突然変異が発見された。が、このことは公表されずに闇へと葬られた。

5世後。各地で、動物の凶暴化、肉体の急激変化、知能の急上昇そして、動物は人類に今までの反撃とばかりに襲いかかった。5世紀当初の人口から5世紀中盤には、五分の一に減った。この頃、世界は一つの機関を軸に動いていた。進化した動物たちは、動物から獸と呼ばれるようになつた。

獸は、銃に撃たれても、すぐに修復し、現代兵器・銃は、あまり効果がなかつた。

唯一の弱点と見られているのは、背骨だつた。背骨を破壊、つまり折つてしまえば良い。

しかし、背骨を折るには、人類は肉体能力が足りなかつた。そのため、機関は獸に対する、戦略核兵器を使用した。これにより、獸は減少したが放射能汚染が拡大した。

使われた核兵器の量はものすごい量としか伝えられていない。とにかく、大半の人類は放射能によって蝕まれた。

残された人類は、手を取り地上シェルターと地下シェルターを建設した。

シェルターは世界中に点在している。

その10世紀後、人類は放射能に対する耐性が出来たと言われている。10世紀後ほどから、放射線による死亡者が減つた為だ。

しかし、それは獸も同じようだつた。獸への非核の対抗手段として、背骨を破壊を出来るだけの運動能力を持つた人を作ることを研究。そして、獸細胞を人に投与できるようにした、N131獸化細胞を

開発。この、細胞を投与した人は飛躍的に身体能力が上昇したが、獸化細胞に対応した体をもつ人は少ないことが分かった。また、投与の方法は、2つ。受精卵の時に仕込む方法。もう一つは、成体に注射で注入する方法。

この、N131獸化細胞を中心とした、BP，Beast，Person計画が全世界で始動した。

そして、僕はBP計画始動2世紀記念で開発された。N383獸化細胞を使用した人をアシストする為に研究された、N282獸化細胞を胎児の頃に投与された。N0,28200001。名前は、みなど。

プロローグ（後書き）

皆様、知っている方は久々です。
知らない人は初めまして。

茶川竜之介です。

よく連載小説を途中放棄していますが……この作品は、冬休みマジで
気合いを入れる作品と言つ事で。冬休み最終日までの連載終了を目指
して執筆します。

文才は全くないんですけど、よければ、最後までお付き合って下さい。

訓練生

「以上。訓練生の授業はここまで。」

と教官が、部屋から出て行く。それと同時に、教室中の誰もが、実戦演習の為のプロテクター、対獣用刀を装備した。

僕も、もちろんながら例外になる訳でなく素早く、装備する。みんなの波の中で、逆らう訳でもなく波に流れて行く。

演習場で整列する。

「よし。各々いるな… 卒業演習を行う。この前、発表したチームで行つてもいいつ。」

「はつ」

「これで、卒業できるか出来ないか決まるからな… 気い引き締めうよ。」

と指導員が付け加え、訓練生はチームごとに散らばる。

「改めて、ようじく。」

と班長のマック・ペリー（男）がにこっと笑う。

「まあ、湊とは、よく組んでるじゃん私ら」

すこし、目つきが悪い（本人気にしてる）メリーハンソン（女）が投擲槍を渡す。

「さんキュ。確かにね。君等なら安心できるし。」

腰と、スボンについている槍入れに納める。

「いや、しかし和夏は？」

「いるよ」

とマックのほっぺたを指で突き刺す。

「目標は、ここにやくつても、ライオン獣種が4つ。これが、突然現れるからうまく擬似背骨を折る。」

「「「りょーかい」「」」

とマック以外の残りで言った。

「よし。第9班！」

「はつ」

「全員だな。よし。出撃！」

教官の声と共に、僕らは地面を強く蹴った。この人蹴りでかなりの速度が出る。

チームは、常に無線で連絡しあう。

『生臭い。』

『了解。』

『どこだ？』

僕は、投擲槍を一本足から取り、背中に投げつける。擬似背骨に刺さったのを確認し

上空に飛ぶ。といつても、市街地の家の屋根に乗るだけ。

『一体処理。多分、西。』

『私が向かう。』

和夏が返答をする。

他は…。僕は、アシストタイプなのでこうこう、探知能力は高い。

『あとは…。東若干北。』

と言つて、ため息を吐く。

『確認。』

マックの低い声が響く。

『アツなんか見つけた。』

とメリーが報告を入れた。終わりだ…これで。

「任務終了。おつかれ。」

と指導員がにこつと言つ。みんなが一応感謝を述べて、座り込む。

「疲れた。」

と和夏がみんなの感想を言つてくれた。

正直、ここまで、訓練の範囲が広いとは思つてなかつた。

「よし。全員帰投。今日は寮に帰つて休め。以上」

対獣戦闘訓練所卒業式。

「諸君等は、この3年間。よく耐えた。以上！」

「よし。主席は、美作和夏。2は、マック・ペリー。3は、佐々木純。4はメリー・アンソ。…」

会場が少しづわつく。和夏に関しては主席で良いと思う。だけど、多分僕はだいたい15位だったかな…。まあ自分にしてはよくやつた！多分…。教官が成績優秀者20番までを言い。式が終わつた。主席20番目までの僕らは、多分同じ戦場にいるだろう。僕らを街を取り戻す為に。

「第2極東地上支部へようこそ。君たち150名には、人類を獣から守つてもう。いや…君の愛する人を守るべき物を守る為に全力を尽くせ。」

「強襲部隊は、左。守備部隊は、真ん中。遊撃部隊は右に集合。」

僕は、なぜか強襲部隊なので、左の列に入る。そのまま、誘導され。

強襲部隊兵舎に来た。昔ながらの日本式の建物で実に趣がつて：これ、本当に、兵舎か？

「敬礼つ」

急に言われて焦りつつ敬礼をする。

急に言われて、焦りつつしっかりと敬礼をする。

「私が、第2極東地上支部強襲部隊隊長。桐山だ」と、田算30歳に満たないと思われる女性が部隊隊長。

「第1小隊は…。第3小隊は美作湊。美作和夏。マック・ペリー。メリー・アンソ。」

一緒の隊…。波乱だ。絶対

「第3小隊の隊長。バリエだ。まあ、よろしく」とメガネをかけた若い男。

「一応、一期先輩になるかな？さちです。」

と優しい感じの少年。でも、名前はかなり有名だ。壁外訓練の時に獣との戦闘に陥り、生徒50名が死亡した事故があった。

その時に獣を2体狩つたらしい。誰よりも冷静にかつ平常心。あの事故は学校側と、守備部隊のチェック不足だったと報告されている。

僕らの時には、本来の動物見学をできた。挨拶をして、僕らは訓練になった。隊長曰く、話しておく事と訓練はしておきたいらしい。

「対獣用刀はどのタイプだ

「ええっと真ん中の物です。」

「そつか

と隊長は一番左の対獣用刀を取り、一振りする。「まあ、なら安心か。うちの支部では、このどうやらかと言つて、この背骨を斬るタイプが主流だからな。」

「さて、適当に基本訓練させておいて、頼んだぞさち。」

と隊長はどこかへと去つて行つた。さちさんは、対獣用刀を2つ取り。こんにゃくを切り刻んで行く。

「…。わて、んじゃまず。斬り込みから。」

みんなが、こんにゃくを斬つて行く。しかし、斬れねえ……！

「…。角度が良くない。」

とせちさんに、軽く指導をしてもらひ。

言われた通りに、斬り込むとスパッと斬れた。

「…おおつー！」

「読み込み早いね。さて、他は…って。マック…」

みんなが、マックの方を見て、言葉を失つた。こんにゃくが、ち

ぎれているのだ。斬れている訳でなく。

さちによる、マックの徹底指導により一応は斬れるようになりました。その後、市街地機動練習。加速練習。持久走。遠距離攻撃。を行い一日は終わった。

今日は、なぜか掃除係といふことで兵舎内のぞうきん掛けをしていた。

「いやあ、平和だ。というか、太陽の下久々だ。」

「何を今更。昨日言えよ。」

とメリーが和夏を突つ込む。しかし、平和だ。獣なんか、いないみたいー。

と思った瞬間、警報音が鳴り響いた。

『全戦闘員につぐ。遊撃部隊、強襲部隊は、ただちに地下門へ集合。守備部隊は、Dブロック3区第45隔壁へ迎え！！』

「強襲部隊第3小隊。全員いるな。」

とバリエが指で人数を数えて言う。

「ただ今、第3小隊は欠員14名のため。遊撃部隊から14名借りている。連携は頼むぞ。それでは、今から作戦を伝える。我々は、Cブロック4区へと向かう。Dブロックに展開する隊が先発。Cが次発。Bが最終ラインだ。既に、獣の侵入が起きているらしく。最前戦には守備隊が展開している。あと、10分後には守備隊は隔壁に登り、撤退する。つまりは、隔壁を修理する為に守備隊は割かれ。我々、強襲部隊がなんとか獣からの都市への被害を軽減させる。命に変えても、守るべき人は守るぞ。」

「了解。」

全員が返事をし、装備を装着する。強襲部隊用装備は初めてだ。軽量型プロテクター。腕部プロテクター。対獣用刀。対獣用投擲槍。投擲爆弾。⋮。

最後の投擲爆弾は装備しなくても良いらしいが。

強襲部隊の服装は、パークーに半カーゴパンツ（槍容れ付）多機能タイプ、軽量スパイク。他の隊と比べればかなり軽いし簡素だ。全てを装備し終え。さちさんに装備チェックを行つてもらう。

「よし。出撃。持ち場に向かうぞ。」

全員で、指定された持ち場へと向かう。既に、守備隊撤退の信号弾は上がっている。次発の隊では一番最後に現場に入つたと思う。指定された区画の一番高い建物に上る。既に前方では、建物の破壊と戦闘が行われている。

「お前。探知タイプだな。状況は？」

「…。状況…か。音探知かこの状況なら。目を閉じ。聴覚に意識を集中させる。

「…。東側が押されていますね。大型の獣を音がします。」「そうか…まあ遊撃部隊が何とかしてくれると、隊長は後ろを見る。

「この第2極東地上支部はきれいな町並みだ。今、知つたけど…。」「隊長！信号弾！」

と遊撃部隊からの貸し出し隊員が叫ぶ。

「色は、赤…。よし行くぞ。信号弾あげる緑だ。」

と隊長は飛び降りた。僕は緑の信号弾を打ち上げ。他の隊員同様、隊長を追いかけた。

ぱつと見、緑の信号弾は4つぐらい上がっている。

「敵だ」

と言ひ隊長の声と同時に刀を引き抜く。が

「うわああ

「一二コン！—」

遊撃部隊からの貸し出し隊員が食われた。既に囮まれているのだろつか？

「さち！」

「はい？」

「お前は、湊と和夏、マックとメリーあと、2人を連れて前のやつをやれ！他は俺に続け！」

隊員は反転し、隊員を食つた獣に向かつ。

「さて。犬型かな？」

とさちさんは獣の前で立ち止まつて言つ。獣は今にも食いつきそうだ。

「なら、躰がいるよねー。」

と噛み付いてきた獣を華麗に避け、背中に乗り背骨を斬る。

「…。さて、次は。」

「えつ…ど。少し北に。」

僕は、左を見て、後悔した。

ゲボボボツボオオ…。獣が、吐いているのだ。あれは、なんだ？人？人？こいつらが、いなければ僕らはー。投擲槍を一つ取り、獣へと接近する。

槍を、獣を目にめがけて投げる。獣の目から血が出ているのを確認すると、僕は、乗つていた建物から獣へと飛び降り、背骨へ刀を突き…。

「あぶない！」

「避ける！湊！…！」

気がつけば、体はものすごい速度で建物にぶつかつた。
だけど、思ったより痛くない。体を起こすと、無線機が壊れていった。

「大丈夫か？湊」「

「ああ…。無線は派手につぶれたが。」

「ちょっと待つとけ。」

と、無線で連絡を取り合つてゐる。装備を見直すと、軽量型プロテクターがぶつかつた時、変な感じだった。

触つてみると、柔らかい…。これで衝撃を吸収するらしい。腕部プロテクターは割れていたので、取り外し。立ち上がる。

「行けそうか？」

「多分。まあ、分からぬいけど

「んじゃ、作戦続行だ。」

マックが、地面を蹴つて、それを追いかける。刀を落としている
くてよかつた本当にそう思いつつ。空を見ると、黒とか、赤の信
号弾が上がっている。

「無線機がつぶれたらしいな。丁度、良い。退くぞ」と隊長がすこしにやつき、黄色の信号弾をあげた。

補給所につくと、第3小隊はかなり減っているみたいだ。
「さち。そつちは何人やられた？」

「借り出し2人が。」

「そうか。装備を整える。刀は刃を交換してもらえ。」

僕は、無線機と、腕部プロテクターをもらい。和夏に声をかけると

「バカ！..」

「うえい？？」

まさか、最初にそう言われるとは悲しいよ。

「先に死んだら殺す！..」

「いや、死んでるし」

「でも、殺す。」

そんな、泣きながら言われても。

「『めん。』

ともう一度謝る。と急に和夏はクスッと笑った。

「いつもなら私が怒られるのにね」

確かにそうだ。和夏はかなり昔から無茶をするし本当に色々あつた。
一応は、和夏とは幼馴染みである。和夏は結構な美少女なのでち
よつと誇らしい。

「ちよつとこっち来て。」

「さちさんに呼ばれ、

「本当にごめんね」

と、和夏にもう一言言つてさちのもとへと向かった。

「いや、生きてよかつた。ホント。どうかした?急に感情的に

なつて。」

「…。すいません。単独行動をして。」

「単独行動なんかどうでも良い。なんか、あつたのかなつて」

「まあ、色々と。」「そつか。まあ、言いたくないことは深く聞くかないでおくよ。君は知つてるか分かんないけど。僕の同じ訓練学校の同級生は50人。訓練生時代に死んだ。それは知つてる?」

「…。はい」

「その事を知つてるなら、君は知つてると思うけど。僕は、訓練生が50人死んだのを目の前で見た。正直びっくりしたよ。僕の隣が一瞬にして、消えたからね。」

さちさんは、すこし、言葉を止め瓶に入った。水に口を付けた。「食われたんだよね。10匹の獣に。その返り血が、ベチャつてかかつてさ。メガネが血まみれで、見えなくなつてさ。メガネをはずしたら、ぼんやりだけど、隣に居たやつの手が転がつてたんだよね。その時、無茶苦茶さ焦つて。刀を抜いたんだけど、思いつきり、腕斬つてさ。力が入らないんだけど、獣に向かつたんだよ。んで、気がついたら2体斬つてた。」

その後、さちさんは暗い話しあやつたねと笑つて立ち上がりて水を取りに行つた。

「壊れた隔壁は一時的に塞いらしい。あとは、獣掃討だけだ。俺等はDブロック2区の担当組に編入。獣の数は多いと聞いている気を抜くなよ」

とみんなは聞いた瞬間駆け出した。

Dブロックに入つた時にはかなりの数の赤の信号弾が上がつていた。

「前に敵！」

「さつきの別れ方で俺に続け。さち探索を続ける」

「了解」

隊長の指示を聞き、さちさんは左へと向かつた。僕はそれに続き、

ひたすらさちさんを追いかける。

「マック先頭に行つて」

とさちさんは言い。僕の横に来た。僕は隊列の2番田。丶字に展开して探索は行う。基本的に、高速移動しながら。

「探索は？」

「…。15時方向に」

「マック聞いたね？」

「了解」

さらに、スピードを上げ15時方向に向かつ。

「あと500M…！」

「戦闘展開。マックと俺は囮！」

とさちは言って刀を抜いた。僕は和夏とアイコンタクトを取り、左側へと向かう。和夏は右側へ。

刀を抜く。獣はサイタイプ防御力は高いが。

「食らいついた！！」 とマックからの報告を受けて、僕は投擲爆弾を槍に付け、サイの背中に投げる。

「爆弾行きます！」

うまく、刺さったのを確認し。爆発を待つ。…。まだいる？

「近くに嫌な感じが」

爆発を確認し、獣へと近づく。

「猿だ！！」

…。最もめんどくさい獣か…って、猿がこっち田掛けて、飛び込んでくる。

僕は、槍を素早くなげ、自分も、猿へと飛び込む。猿はギリギリで、槍を避け奇声を上げ距離を縮めてくる。

「キエエエイ！！」

とこっちも声を上げながら僕は猿へと、刀を一振り。なんと、腕を切り落とせたが、全く効果はない

「ウキイーきいー！」

いや、うるさくなつた。

「ゲベエエ！！！つーか死ねえいいいい！」

とメリーに聞いた通りに、正面から骨を狙う。正面から飛び加速すると、相手も正面から来た。当たる瞬間に僕は槍をとり、猿にさす。さるはかまわずに長くのびた爪で切り裂きにくるが猿の急所でもあろう股間を蹴り上げる。そして、落ちてきた所に背骨を斬つた。

「サイタ

卷之三

対戦用刀に付いた血を払い、さち、マック、メリー、和夏を追いかけた。

5

血の雨

「状況は良くない。既に、ロブロック2区の部隊は結構な数が撤退してゐる。そろそろ、次発の奴らが来るはずだ。俺たちはそいつ等を確認後撤退いいな」

「了解。」

隊長たちと合流して、比較的高い建物上で今は状況を探索中だ。

「信号弾赤確認！」

「探知！ 敵は？」

「…。猿？」

多分分からぬが入っぽい足音が聞こえる。

「良し。白兵戦だ。刀が苦手な奴は後方から投擲支援。良いな。」

「マック…。君に任せよう」

とさちさんは、自分がもつっていた槍を渡した。この行動を見て、みんなはもしものときの1本を残しマックへと渡した。

「前衛は、お前等と俺。」

と貸し出し隊員3人を指差し言つ。

「中衛は、残りのマック以外…。あと、煙幕あるなら焚いておけ」
そう言つと、隊長は信号弾が上がった方向へ走つた。

「さて、マック。これを隊長が向かつた先に撃つて。」

とさちさんが、煙幕弾を渡す。マックは、無言で受け取り煙幕弾を放つた。

「さて、前進だ。僕らの任務は支援だよ」

大体、1分後に僕らは隊長たちを追いかけた。別的小隊もこの場にいるらしくかなりの数の味方の死体を目の当たりにした。

「敵！ 14時！」

「了解」

僕は刀を抜き14時の方向にいる猿に向かつた。

「マック支援！！」

と言つて僕は、猿による爪攻撃を避ける為に建物の壁を蹴つて地面に降り立つ。マックが投擲爆弾を投げ、チンパンジーの近くで爆発した。

猿が騒いだのを聞いて、メリーガ猿の背骨を刺し斬った。が、メリーの後ろに猿が来ている。それを、僕は斬りに再び空中へ飛ぶ。右足のホルスターから、投擲槍を取り、メリーを狙つ猿に槍を投げる。

「一旦退け！爆弾を使う！」

誰の声かは、知らないが無線で聞こえているので、同じ小隊の人だろう。

「了解です」

僕は一応返して、地面を蹴飛ばした。

僕とメリーガ、去つたのを確認してあの路地が爆発した。

「状況は？」

と隊長の声が無線内で跳ねた。

「静かです」

メリーガ、返して僕の元に来た。

「さちさんたちは？」

「行きますか」

と、僕は地面を蹴つて、さちさんたちの方に向かつた。

「さちさん！」

さちさんは少しキヨロキヨロと、周りを見て僕らを見つけて近づいて來た。

「お疲れ。隊長が、爆弾を仕掛けてたんだろ？」「

「はい。お陰で、ずいぶん楽でした。」

「そうかい。さて、次はかなり状況は悪い感じだよ」と指を指す。指がさされた、方には巨大兵器としか良いようない獸を中心に猿系、犬系などの高機動系の獸が群がっている。「どうするんですか？あれ

「今所は、うまくあの場に押さえてるけど。他の区の奴らが終わ

るまでは様子見かな」

「守備部隊による支援砲火を利用かな？うまく行くか分からぬけ

ど。」「

…。しばらくは、このままか。

「隊長たちからの支援要請だ。行くよ」

とさちさんは、建物から降りた。

「どうした？ つかれたか？」

とマックが少し心配そうにこっちを見る。

「まあ、少し。」

「らしくないな。お前が」

「そうか？」

さちさんに続くため、建物から降り、ふと考える。今、マックにしては珍しい事を言つたと思った。へらしいとかそう言つ事はあんまり好きそうじゃないとばかり思つっていた。下に降りて、思うが予想以上に街は死体で溢れている。

「敵15時！」

「槍を投げとけ」

和夏の報告に素早くさちは指示を出す。今の指示を聞いた限り、隊長たちはかなり状況が悪いのだろう。そう言つ感じがする。

「っちー！」

とさちが、上へと大きく飛び上がる。前から、獣たちが向かってきているのだ。僕も慌てて、地面を垂直に蹴り建物の壁を蹴つて屋根へと上がる。ついに来て思つ、さつきよつ黒と黄色の信号弾の数が多い。

「隊長を見つけた。俺が回収する他は支援しろつ」

とさちさんは、止まつている隊長のもとへ飛んだ。

「18時よりさつきの奴らがつ

「マック支援。俺が行く」

僕は、槍を一本取り、3体の獣へと向かつ。やつらを、かわし、一

匹の背中に槍を突き刺す。他は、ぼくになんか、目もくれずマック

へと突進して行く。マックがあわてて、槍を投げるがそれを当たるうとも獸は止まる事がなくただ突進した。マックが引きちぎられた。僕の目はその情報を正確に伝えた。

「マックうう！！」

僕以外の2人も同じく口にしていた。

約束したじゃん。一緒に故郷を取り戻そうつてー。

撤退の鐘がむなしく響く。最後の槍を手に取り、マックの肉をもつて行く獸を冷視した。そして、僕が、蹴りだそうとした時に

「ビシヤツ！！」

すでに、マックを食らっていた2体の獸の首が吹き飛んでいた。斬られた断面から、血が噴水のごとく吹き出す。白い髪の毛が血で赤く染まってしまった和夏がそこに立っていた。

「和夏っ！！」

僕は、倒れて行く和夏のもとへと飛びそと倒れないように抱きかかえる。そこに居たのは、いつもの和夏だった。

「…。ここは…どこだ？」

「あつ、気付いたようだね。」

と、わちさんが読んでいた小説にしおりを挿みパタンと閉じた。

「…。どこですか？ここ」

「（こ）こは、第2極東地上支部強襲部隊兵舎医療棟だね。」

「…。戦闘は終わつたんですか？」

「終わつてるよ。まあ、結局隊長を抱えて出て来たら遊撃部隊第4小隊の人たちに君たちが保護されててね。守備部隊による砲火門総砲撃をおこなう直前だつたから、ホントに助かつたよ。他に誰もいなかつたら僕らは死んでいたよ

「こう事は、隔壁内での掃討作戦は終了したんだ。

「和夏は？」

「隣。」

「そうですかつて……」

久々にビビった。まさか、同じベットにいるとは
「これは、ベット数足りねえーし……みたいな？」

「全く違う。気がついたら

……ある意味すごい。

「あつそうだ。多分。若干の心に問題があるだらうから君も気をつけなよ。N282、N383もまだ詳しくは分かつていらない獸化細胞だし。あと、メリーはN181獸化細胞を投与されていてちょっと問題が発生していてね。」

「ちょっと問題？」

「まあ、君は元々色々な特別教育を受けているから知ってると思うから言つけど。N181獸化細胞は、非常に汎用性をもつているんだが、精神的衝撃を受けると獸化細胞が不安定になり身体が危険にさらわれる。今は、安定化をしているらしい。」

らしい……僕らは実験兵器。兵器であり、実験体でもある。もし、その実験体が死んだとしてもスペアはいる。

「まさか、メリーは処分ー。」

「いや、それはないとと思う。確信はないけど……。実質、N181獸化細胞を投与されている実験体はほとんどない。でも、計画自体が頓挫してるから……」

「信じましょう……先輩」

「……わかつた後輩」

と、さちさんは仕事があるからねと病室から去つた。少しの静寂。といつても看護士などの足音や機械類の音はあるが

「……マック……」

「……」

そつと、和夏の髪の毛を撫でる。いつも白い髪の毛だ。赤色に染

まっていたのが嘘みたい。いや、嘘と思いたい。

僕は、再び和夏のとなりで寝てるのは流石にまずい思い。ベットから降り近くにあつた椅子へと腰を下ろした。

「生きてたか。バリH」

「…。残念ながらね…どうも、俺は死神みたいだ」とバリエは普段はあまり言わない自虐を吐き、見舞客に目を向けた。「いや、しかし俺みたいな一小隊長の見舞いなんかに来るほど暇か?強襲部隊隊長さん」

「なんだ、人がせっかく来てやつてるのに。相変わらず、可愛くないな…お前は」

花束を無造作に、病室の机の上に置き強襲部隊隊長桐山は椅子に座つた。

「今日は、何のようだ?なんかまた、どつかの隊が問題でも出したのか?」

「いや…。今回の防衛戦は犠牲者が多すぎてね。うちの隊だけで7名死んでね。大幅欠員だよ」

「それで、まさか巡察に行くんすか?俺が」

「いや、この前も行つてくれたじゃん。どうせ、しばらくその体じや獸化細胞があるとはいえないんじゃないでしょうに。両足骨折だろ?なら巡察ぐらい松葉杖付いて行つてこー!」

「…命令?」

「命令!…」

「了解しました」

バリエはぶつきらぼうに言う。それを確認して、桐山はそれでは明日に第5地下支部と付け加え病室から出て行つた。

桐山が隊長室に戻ると、たちが来ていた。

「さあ。きみは、バリエを救つた代わりに一人の新兵を失つた。そ

して、生き残った3人も負傷している

「はい。僕が、独断しました。」

「…。やっぱり、あれか？」

「…何の事でしょう？」

「いや、バリエから聞いてないのか？」

「いえ、何も？」

「そうか、ならない。3人のケアしつかりな。あと、バリエはしばらく戦えない。さちが代理隊長だ。いいね」

「はつ。着任します。」

「ん。さがつて良いよ」

「失礼します」

さちが出て行つたのを確認し、桐山はため息を吐いた。あの時をもいだしてー。

こんな会話をしているが、市街地機動練習をしている。市街地機動とは、屋根と屋根を飛び移つたり壁を利用して、獣からの攻撃及び追撃を振り切る移動戦法。ちなみに、訓練学校ではこれで欠点を取るとよっぽど座学で高くないと卒業できない。しかも、卒業したとしても技術開発局にしか配属されない。

「さてと、もうちょいスピードを出すか

とさつきより、気持ち強く壁を蹴る。市街地機動では、基本装備のスパイクと投擲槍を使う。着地時に、止まる為に槍を差し込み止まる。スパイクだけでも可能だがスパイクだけでは即時停止は厳しい。特に、スピードを求められる強襲部隊はスパイクの歯の数が少ない軽量型スパイクのためよけいに必要になる。

屋根の上に着地する前に反転し、先に槍を滑らせスピードを落とし足をつけたと同時に蹴る。

うまく、急転換が出来て安心しつつ後続の様子を見る。うまくできているよつて良かつた。

そのあと、大体2回ぐらい休憩をいれて、2時間ほど市街地機動をして、今は備品整備をさちさんに教えてもらつていて。

「つづの正式採用の対獣用刀は刃がセラミックなんだよね。だから、斬るように言われている。まあ、うちが海の近くで鉄刃だとさびるつていう悲しい事実のおかげだけだ。」

さちさんは、そのあとダメな刃の見分け方と刃の変え方を教えた。

自の翻（後書き）

現在、低速執筆中。
感想…暇であれば、くださー。お願ひします

仮設拠点調査任務（前書き）

すいません、タイトルを変更したいと思います。

12月17日土曜日にタイトルをRebellion to Jupiterに変えようと思います。

意味はJupiterは天地を支配する最高神つまり、話の中での獣
獣への反逆と言う意味です。
本当にすいません。

仮設拠点調査任務

「本日付けで編入されました。」

と僕よりすこしだけ、あとに戦場に来た人たちが僕に敬礼をした。

「えへっと、強襲部隊第3小隊に編入へ？」

「はい。」

「それでは、こっちです。」

隊長に言われた通り、誘導した。

「これより、第3小隊は第14小隊との合同市街地機動訓練を行います。」

第14小隊長が軽く説明を織り交ぜつつ、言った。簡単にルールをいうなら逃げ役に引っ付いているリボンを取るゲーム。

僕は、逃げ役。まあ、よく市街地機動は得意な方とみんなに言われるけど。

「いや～すばしっこい！」

とうちの隊員さつもんと14小隊の人たちが言ってくれた。

「さちさん途中から凶変しましたようね？」

「あ、確かに」

と同じ逃げ役の和夏が同意する。

「でも、メリーもかなり危ない」

と付け加えた。この言葉を聞いて、メリーは若干不敵な笑いを浮かべる

「いや、もうちょい足が通常にもどつたらつぶせるけどね」「つぶすって・・・」

全く、怖い怖過ぎる。殺す気満々じゃないか。

「先輩... もうむりです。」

と一応後輩が地面にたおれながらおのの口にしている。意外とスマニアのない人ばかりなのだろうか…

「任務だ。極東第2地上支部がいま、第2隔壁まで攻められている。これは、第3隔壁までのエリア奪還への作戦だ。今までの、強襲部隊の活動のお陰で隔壁の穴を全て確認した。穴は全部で3つ。一つは、第3隔壁工リアを封鎖した理由になつているファーストホール。僕らは、仮設拠点へと向かい。現状を調査そして撤収。これだけだ。」

「試運転ですね」

「そうだな。まあ気は抜くなよ。新兵は大体3／5の確率で死ぬ。そして、それを生き延びた者は洗練された狩猟者になる。そんなかんじか。マニュアル通りに言うなれば。」

隊長は少し笑つた。

「12時間後。強襲部隊第14小隊と共に出撃。」

「最近…湊は変わったよね」この和夏に言われたセリフが頭にこびりついて離れない。僕はこんなに神経質…いや違う。変わってしまつたんだろう。

僕は獣殺しに。

「久々だね。一緒に夜空を見るの」

「そうだね…小さい頃はよく見てたのに」

幼い頃に居たところは自然が豊かでとても静かだった。僕が住んでいたところは近くには、和夏しか近い歳の子供は居なかつた。

「いつか、お母さんお父さん弟妹の墓を立てるってマック言ってたよね」

「…。そういえば、言つてたね」

僕らは、ここまで、今居るこの極東第2地上支部を目指して来た。

今居るところから見えるのは、弱い者は獣に喰われ、強い者を喰う。弱肉強食の簡単なルールの世界。

もっと狩猟者は死なないと思っていた。あんなに厳しい訓練を受けたのに。マック君は…狩猟者に成れて良かつたのかい？

「装備確認。」僕は、和夏の装備を確認する。特に、問題はないので、僕の見てもう。他の隊員も済んで

「よしでは。只今より、第11仮設拠点に向かう。まあ、死ないようにしてくれ」

隊長は守備部隊と遊撃部隊への合図の信号弾を打ち上げ、隔壁から飛び降りた。みんなが順番に降りていく。壁の降り方としては、降下用のロープを使う。自分の番になり、降下用ロープを握った。

「よし降下！」

守備部隊の隊員が叫ぶ。僕は壁をロープを滑らせ壁をはって行く。下に着くと、守備部隊と遊撃部隊による支援のため獣は居らずに、同じ小隊隊員が展開して居た。

「よし、さちの方に行け」

「了解」

今回も、僕はさちさんが率いるチームの方らしい。隊長は、主に小隊を2つに分ける。

おもに、支援隊と攻撃隊に分ける。隊長が率いる方が主に攻撃隊。さちさんが率いる方が支援隊だ。

「よし。全員居るな。行くぞ」

隊長が、地面を強く蹴り隔壁から離れて行く。今日は、全強襲部隊が全仮設拠点の確認を行う日なので、守備部隊や遊撃部隊の支援の量がすごい。

「よし。状況確認！」

と、隊長は、旧市街地で停止して立つ。

「付近に足音なし。」

僕は、素早く言づ。他の探知タイプの人もうなづく。

「よし。では、ここで小休止」

この台詞を聞いて、みんなはおのれの好きに休憩をしている。まあ、探知タイプは小休止中にも気を抜けないが。僕は、ウエストポーチからクッキーを取り出し、食べる。しかし、全く空だけは綺麗だ。

「…。信号弾…」

色は黒。なにか、脅威になりえる獣でも出現したのか?「…。血の匂いが…」

「他の隊がやられたか」

通常、人は獣化細胞を使っても平地では獣には勝てない。それは数どつこうの問題ではない。いくら足搔いても圧倒的な力の差がある。「さて、出発しようか…。獣たちが向こうに向かうだろ?」「う

隊長は立ち上がり、隊員を見た。僕も立ち上ると、和夏が体を起こすのを手伝えと手を出した。和夏の手をつかみ、背中の方に重心を傾ける。すると、予想よりも軽く体が浮き、余計に引っ張ってしまった。和夏の体がどんどん僕の方に倒れて、少しマックの事を恨む。マックはいつもわざと体に力を入れて重くしたせいで和夏に迷惑をかけたじやないか。

バサッというで和夏が僕の上に倒れた。

「ごめん…。」

謝るけど全然和夏は反応を見せない。

「お熱い事で」

とメリーハニヤリと笑って、和夏の手を引っ張って起こす。
「そんなんじゃないだろ?」

一応、反撃して僕は立ち上がった。はあ、付いてない。

「…。湊。わざとか?」

…た、隊長まで…。みんなが笑って隊長を追いかけて行く。僕も、少しあとにみんなを追いかけた。

結局、仮設拠点は全く問題もなく。
また、旧市街地に居る。まあ、今は旧市街地で小休止でなく通過だが。

みんな、疲れている為まったく表情がない。

「…。血のにおい?」

「停止。探索しろ」

隊長は、全員を止めた。僕は、全神経を視覚にまわす。僕は、比較的視覚が優れているらしい。

「音…わずか。」

「若干の気配。」

「つチ…。仕方ないな。今から、作戦を伝える。第一目標は逃げる事だ。そして、誰か一人を犠牲としなくては行けない。まあ、いうまでもなく俺が行くが。」

「隊長。すいませんが、それは副隊長として、認められません。」さちさんが、いつになく声に力が入っている。

「うるさい。これは、命令だ。」

と、隊長はさちの頭をぽんぽんと叩いた。隊長はいつも通りの顔で閃光爆弾を確認した。

「さち、行け。おまえらは、守るべき命を守るんだ。」

「…。隊長…どうしてもですか？」

「お前らしくないな。お前は、俺の下に付いて強くなつたし、お前がもつてた良い所で俺を支えてくれた。だから、お前は独り立ちだ。今まで、支えてくれてありがとうな」

「…。田中さちお…了解しました。」

さちは、震えた声で言つと、僕たちや新兵の方を見て言つた。

「撤退。行ぐぞ」

「…。さて、これを使つときが来るとは」とある硝煙弾を撃つた。

「あいつらを見届けたかつたな。まあ、さちならまかせれるか」獸の気配が肌で感じれる。もう、かなりの数が集まつているようだ。しかし、今日はかなりの獸が居たのか。まあ、俺等は滅び行く存在かもしけないが、小さな望みを抱く事くらい許されるだろう。

「さて、おっぱじめますか」

そう言つと、バリエは投擲爆弾の安全ピンを抜いた。

仮設拠点調査任務（後書き）

こんにちは、茶川です。
更新が遅くなつてすいません。
出来れば、週末中にもう一話あげたいです。

大好き（前書き）

お待たせしました。なんとか、月曜日に書き上がりました。が、ち
ょつと内容量は少ないです。すいません。

大好き

結局、支部に全員で帰つて来た部隊は出撃した全24小隊中2小隊のみ、そして帰つてこなかつた小隊は3小隊。これが、獣が支配する土地へと踏み入れた代償。それでも、僕らは立ち向かう。

「1日休息のあと、2日間の連携訓練。そして、オオクラ地区へと移動。オオクラ地区の守備部隊と連携訓練を行い、オオクラ地区付近獣群れ分散作戦に参加する。」

とたちさんが、司令書の内容を語る。今は、たちさんが臨時に小隊長を務めている。

「質問は？……ないか。解散」

みんなはこの言葉を聞いて、とぼとぼと更衣室へと向かう。そんな中、和夏は突つ立つていて。

「どうしたの？」

「……あとで、用事ある」

和夏は、そう言うと更衣室へと足早く行つてしまつた。何とも言えないこの残された感。いわゆる、孤独感か？いや、ちょっと違つた。

「あつ先輩。」

と更衣室に入るや否や、僕より少しあとに戦場に入つた同い年の確か名前は、コーリが僕を呼んだ……どうか、来たのかよお前つて感じか？

「すいません。先輩。ちょっと聞きたい事が」

「何？答える事なら良いけど。」

僕は、軽量プロテクターを外してコーリを見た。

「この街でおいしいめしや知つてますか？」

「……えつ……そう言つ感じの質問？」

「……えつ……はい」

「……ごめん。言いくらいんだけど全く知らない。たちさんに聞いたら方が良いかもしない」

強襲部隊制服のパークーを脱ぎ、中に着ているインナーシャツも脱ぐ。今日は寝るだけ。そう信じたい。

それを洗濯室行のBOXにほり込み、シャワールームに入る。

「それなら、先輩今日暇ですか？」

ユーリーは僕を追いかけ、隣のシャワーへと来た。しかし、犬みたいな奴だ。つて、21世紀の人は思うかもしれない。まあ、今でも犬は居る。獣化しなかつた種がわずかに。そして、それはすべての動物に言える。全てが全て獣化した訳じゃない。原種の方が多い種もある。例えば、人。僅かながら、獣化した人もいる。詳しくは知らないけどね。

「あ～…。悪い先客が居てね」

和夏に呼び出しを食らうなんて初めて何で色々な事態を予想しているが。正直、

「怖い…いや恐ろしい」

「？先輩？なんかありました？」

おやおや、余りの恐怖の余りに口走ってしまったとは疲れてるのか自分。

「全く何でもない…最近疲れていて、ちょっとね」

しかし、シャワーよりも風呂にゆっくり入りたい。まあ、地上支部ごとにそんなものないか…。

シャワーの水を止め、用意していたタオルで体に付いた水を拭く。また僕の前から人が一人いなくなつた。

僕は、他の男子隊員より早めに更衣室から抜け出す。正直な所あまり更衣室は好きじゃない。まあこれは、僕に限った事ではないかも知れないが。

「おつ、湊お疲れ」

「さちさんお疲れ様です」

「嫁さんが待つてるぞ」

「…」

いやいや、笑い過ぎでしょ。」

「一応、速く行く事を進める」

さちさんはそう言つと若干嫌な顔をしつつ、更衣室へと足を踏み入れた。

さちさんは、どうやら僕と同じじらし。

まあ、それはそれでいいけども。どうでも良い事を考えるのはちょっと止めよう。そう自分に聞かせ、僕は自分の家へと向かった。家に入ると、いつもと同じく僕のベットは毛布と猫といつもライオンっぽい抱き枕が無造作に置かれている。

どうさつと、ベットに倒れ込む。今日も疲れた。

…。まだ、辺りは暗い。どうやら、まだよるらしい。しかし、いつも抱きついてるライオンがなんだかいつもよりあつたかくて、また違う暖かさがある。…ふう…眠い。寝よう。…。

…。つて…眠い

…。いやあ、なんだか僕は幸せだ…寝よう…。

…。つて…眠い…

…。また、フェイントと思つた人。人を信じましょ。うそ。

…。次こそはふざけてないと思つた人。人を疑いましょ。うそ

…。もういや、遊ぶの止めよう。僕が、こんな風に遊んでいる間に僕の抱き枕の位置にいる人はいろいろとごろごろ良いながら頭を僕の薄い胸にこすつてくる。いやあ、猫みたいだにやつかわいいね。

…。

…。鍵は…壊したの?」

「そんな事する訳ないじゃん。ピッキングした。」

「え?ピッキング?…あ~」

…まあ、和夏の技術を使いたら赤子の手を捻るとかより簡単に空けるんだろうな…。

まあ、僕も一応は出来るんだろうけど。

「んで、はなしって？」

「そうそう…って来てつて行つたのになんで、寝てんの？」

「いや、そつちメリット遭つたでしょうに」

「そうそう、むっちゃかわいい寝顔見れだし。私のにおいこすりつけれだし。」

「だしよ。という事で、寝ようか？」

「うん！一緒に寝よ！」

「いやあ、かわいいなあ～

「好き？和夏の事」

「大好き！」

「こういうときはとことんやり返さなくては。

「私は、湊の事が大好き～えへへへ～」

「僕は、和夏がだ～いすき！～」

バカッフルを演じ返すのは大変だ。うん。

大好き（後書き）

次は、週末までには

ホホクラ地区（福島村）

遅くなつてホントによこません。

オオクラ地区

2日間の連携訓練は実に辛かつた。1日目なんて、1日中市街地機動戦闘訓練をすると云ひ、司令部の暴挙に会い。2日目は連携訓練。正直、一緒に訓練をした部隊の新兵なんて2、3人倒れている。んで、今日はオオクラへの移動。

まあ、精神的には疲れ満タンだけど。たちさんに言わせると、最初に配属された部隊よりも楽らしい。

「よし。到着だ。荷物を持て、さっさと降りるよ。」

たちさんは素早く、自分の荷物をもつ。他の隊員も荷物を持つ。船が着岸したのと同時に、僕らは降りて行つた。

初めて来た、オオクラ地区は、僕からは、意外と栄えているなと思った。

オオクラ地区は、第2極東地上基地の現存する数少ないの地上農業地。元々は、獣の研究場所として、建設していた所だ。

「ここにちは。オオクラ地区守備部隊部隊長の優一です。」

と優しそうな顔の少年がたちさんと握手を交わす。なんとなく、同じ年に見える。

「ようしくお願ひします。強襲部隊第3小隊隊長の田中幸男です。」「早速、作戦の事ですが。3日前に獣で統制がとれた小規模な群れを確認しまして」

「統制ですか…。そのときはどのように対処しましたか?」

「隔壁上の移動砲で、牽制をしました。なにしろ、そのときは、そちらの方に部隊を貸し出していまして。」

「そうでしたね、確か…」

まあ、戦力が足りないので珍しく強襲部隊に協力を求めたと言つことか。今日は、移動だけでこのあとは貸し兵舎で睡眠。昨日、おとといと比べると、今日は天国だ。

「みなと。貸し兵舎にみんなを誘導したあとに、ちょっと用事ある

から来てくれ

「わかりました」

貸し兵舎は意外と近かつた。…正直な所、休みたい。無理な話だけど。

「んじゃ、各自休んで」

僕は行きと回りスピードでたちの元へと向かつた。

「悪いね。」

「いえ。それより要件は?」

「まあ、ちょっとね」

それ以上聞かなかつた。まあ、なんとなく、聞くのがめんどくさかつたのがある。

「着いたね。」

とさちさんは足を止めた。そこは、オオクラ地区で一番北側の隔壁の上。

「ここから、見える…かなあ。」

と指差す。

「あれが、太古の壁」

「…。アレが?」

太古の壁は、なぜか、出来ていた壁。だが、この壁がなければすべての地上支部は出来なかつた。今見た、太古の壁はものすごく大きく、そして全く人工物ではない自然の物のように見える。そして、なぜか恐怖を感じた。

「どう?」

「なんか、す”いつす」

「そうだね。それは僕も思う。あと、なんか怖くない?」

「た・・・確かに。」

「あれは、人が作った物ではないっていう論がある。僕はこの論を信じるけど」

この論はわかる。何か人を寄せ付けない気配がある。

「さて行こうか」

と、たちさんは先に兵舎へと帰った。僕も少しあとにその隔壁から離れた。

ほんとに、僕は小さい。

身長も精神も

「では、作戦を説明する。」

と、優一さんがホワイトボードに地図を貼る。

「今回は、主に森の中に隠れている獣の群れを森の外にだす。これのみ。」

森の詳細位置を書き込む。

「支援は？」

「本部の対大型獣用砲のみ。」

「それは、追い出した後ですよね」

「そうだな」

「…。きつい。大体40人で、大体20体を相手する。2対1…。正直やつてられない。」

「あと、3人一組に分かれて行動。以上。装備をすませ作戦を開始。」

「僕は、素早く軽量プロテクターを着て対獣用刀、槍を装備する。」

「みなど。メリーリーとユーリーを頼む。」

「分かりました。」

さちさんは、僕の隣に居た。和夏にも、誰かを頼むと言った。

まあ、分け方としてはそんな所じやないだろうか。メリーリーは戦闘能力は高いけど、未だに精神汚染状態から完全には脱していなし。メリーリーと比べると和夏は比較的安定感もあるし。

「よし。全員。装備確認！」

僕は、和夏に確認してもらい。和夏の装備を確認した。

「出撃！」

オオクラ地区（後書き）

冬休みに突入したので更新速度をあげて行きたいとは思っています
が…。
まあ、頑張ります…

群れ（前書き）

クリスマスは楽しめました。自分はですけど。
そして、かきあげれました。

僕は、討伐隊4分隊を率いている。正直実感なし。

「…。とりあえず、囮なんだね。」

「あとは、信号弾街だね。」

メリーは、いつも通り少し悲しげな顔で言つ。

「先輩…。」

「なに?」

僕は、いつも通りの声で言つ。

「怖つす。先輩は?」

…。そう言えば、獣に対して恐怖を覚えた事はそんなにない。

「慣れた。」

僕は、そう言つておいた。本当は違うと思つけど。

しばらくの沈黙が流れる。まあ、仕方ない。ここは、緊張のほぐし方とかを教えると好感度は上がるんだろうな。正直めんどくさいけどね。

「じょうもない事をうだうだ考へてる間に信号弾上がつたよ」

…。

「さて、行きますか。」

僕は、強く地面を蹴る。森の中では、人間はある程度有利だ。理由は言わずとも理解できるであろうが、市街地機動に近い、いや、機動戦が可能だからだ。まあ、獣の猿類は森では更に厄介だが。

森の近くで待機していたとは言え、まだ、木の上での高速移動が出来るほどの木の密度が少ない。

大体1分走ったあたりで、木の密度が上がって來たので大きくジャンプし、木に飛びつく。

「赤色信号弾多数。」

「早すぎでは?」

時間は、朝明けぐらい。通常は、獣はまだ活動が鈍いはず。

「まさか、気付かれていた？」

僕は、近くの木に止まる。

「…。廻り見とけ。探索する」

僕は、耳を澄まる。

何かがいつもと違つ。森が落ち着きがないのだ。他の森にはないものが聞こえる。

「…。黄色信号弾！」

「やつぱりなんかあつたな。」

「なんかって？」

…。なんかって言った時点で分かる分けないだろ？

「なんか…」

メリーガ僕の言いたい事を言ってくれてよかつた。僕は、オオクラ地区の一番近い隔壁へと走りだした。

「湊。お疲れ。」

和夏が頬を少し緩ませ、僕の方にはたばたと走つて來た。

「和夏こそ。お疲れ」

「メリーもお疲れ」

「ん。お疲れ」

と、メリーや和夏は頭をなで回されて、くしゃくしゃにされている。メリーやの髪は無茶苦茶ストレートなのでもみくちゃにされても、まつすぐに直つている。

「…。」

「やめて～」

メリーやがやり返しどばかりに和夏の髪の毛をなで回すと、和夏の髪はメリーやと比べると若干癖つぽいので若干荒れています。

「…。くしゃくしゃ…」

メリーやがにやりと少し笑つて言ひ。

「つるさいなあ…！悪かったなー癖つ毛で」

「…かわいい…」

とメリーガ更に和夏の髪の毛をなで回す。

「…。女の子は良いな…。ふと思つた。まあ、ただ単に僕が髪の毛が好きって言つ理由から僕が思つてゐるだけかも知れないけども。」

「湊居る?」

「なんじょ「う?」

「いや。さつきの撤退の理由だね」

「何だつたんですか?」

「獣の群れどうしの戦闘。繩張り争いだね。近く、冬に入るし。確かに、隔壁内にテリトリーをもつと言つてみれば、食料には困らない。スーパーの中に暮らしてゐみたいなもんだ。しかも、盗んでも気付かれない。」

「そう言えば、もうそんな季節ですか?」

「まあ、君等はここ3年間ぐらいためで暮らしてたみたいなもんだもんね。」

「で、結局獣狩りは?」

「とりあえず、様子見だね。明日、明々後日ぐらいまでやり合つてるだろう。かなりの数を確認したし。」

「そうですか?」

「兵舎で休めるのかな?淡い期待を抱いておひつ。」

「ま、取り合えず僕らはここでしばらく待機。」

「了解」

もうすぐ、冬ひつことだけつこつ、寒い感じだ。今、着ているパークーはそこそこ薄いので結構寒い。中に、保温系のTシャツを着ていたよかつた。

ここで待機つて事はみんなに伝わつたらしく、みんなは少しげんなりしている。まあ、和夏とメリーアは例外らしいけど。

そのまま、大体4時間は待機と言つ名田で外に居た。そのあと、すぐ兵舎に戻らしてもらい。オオクラ地区の名物でもある温泉に行く事になつた。まあ、温泉と言つてもオオクラ地区の軍用地ないにある風呂場だが。

「いや～生き返る」

「…。ホントに、お前10代？」

コーリに誰もが、突っ込んだ。あつたかい湯船に体をつけたときの何とも言えない快感は分かるが。いつも通り、体と髪の毛を洗い風呂に片足をつける。

「アッ…！」

思わず、飛び跳ねてもうた。足はかなり冷えてこるらしく。もう一度、意を決して足をつける。

ほら来た。この何とも言えない…痛み…。痛い…。

「ふう…。良い湯だねえ」

とさちさんは実に気持ち良さげな非常を浮かべる。風呂つて良いな。今日は、そう思った。

風呂から上ると外は、雪が降り出していた。外の景色を僕は、一人で感傷に漫りつつ見る。明後日か。正式決定は。

「今日は?どうする?」

気がつくと、和夏が僕の隣に座っていた。

「ん?どうするって?」

「久々に…」

「…そう言えば、そうかそんな時期?」

正直、それをするのがめんどくさい。僕と、和夏にとって実際に必要な事ではあるが…。

「何そのいやそうな表情。」

「だってさ、研究者もひちよいなんか、考えてくれば良かつたんじゃね?」

「まあ、…確かに。結構恥ずかしいし」

…。結構で済むのかいな。僕からすりや、結構びじびじやない。正直、顔は普通な僕が美少女な和夏とあんな事をしたくない。

「でも…私は好きだけど…」

…。

「え…？ええええええええええいいい？？」

ぐらつと来て…。

「ちょっ！…みなとー！…しつかりして…！」

「あ～やらかい…こんな枕つてあつたかくてやらかいかな…。」

「なんで寝てるんだ。」

「あ～確かに寝てるね。」

「いやいや、原因は

アレか…」

「前と同じつて思つた人。ごめんなさい。」

「何これつて思つた人。読み直しやがれ…！」

「すいません。調子乗りました。」

「やらかい。」

「…。おはよづ」やります…。」

「あ。おはよづ」

和夏が僕の真上でこいつと笑顔を作る。今は、お風呂上がりつてこ
とで髪の毛をまとめているらし…。可愛いな

「…。なんで膝枕」

「…。気持ちいいかなつて」

「…。配慮してくれたの？」

「…。」

和夏は静かにうなづく。

「…優しいね～。そして、可愛い。かわいいいいいいいいいいいい
いい」

和夏は顔を真っ赤にして、そっぽを向いた。そろそろ、頭をのけて
あげないとかわいそうなので、僕は体を起こした。
すこし、体のだるさを気にしつつ僕はすこし大きいあぐびをした。
「…。そういうば、するんじゃなかつた？」

「…。」

「くくりとうなづく和夏可愛いねえ。」

…。ヤバい。いつもながら緊張する。大きく深呼吸をする。平常心。平常心だ自分！出来る出来る！－

「それじゃあ、行くよ。」

「きて」

僕は、和夏へと近づく。顔と顔が大体あと30センチ。…。平常心。そうだ。どうせ一ヶ月に一回してるんだ。そうだ。生まれた時…いや、それは言い過ぎだな。まあ、でも4歳くらいには僕はこの和夏の生命を保つ為に必要な、獣化細胞の毒素の吸い出しを行つて來ている。

あと、5センチ。その、毒素の吸い出し方法は簡単。

あと1センチ。屬に言つ、キスをすれば良い。

唇と唇が触れた…。

毒素の吸い出しあとは、けつこう体がだるい。まあ、和夏の毒を僕が大体半分くらい接種して、消化していく。まあ、すつすぐはづらい。

「…。ありがと。」

「いいよ。義務だし。」

そうこれば、N282細胞をもつ僕のプログラムの一つの一つ。N383細胞をもつ被験者のアシスト用の細胞。N282細胞の被験者は、いわばN383細胞をもつ被験者が居なければ存在価値がない。

すこし、体に毒の影響が出てくる。ちょっと、気分が悪い。

「だいじょうぶ？」

「…。」

うなずいて、僕は、震える体を起き上がらせた。

「いや、今日はゆっくりして行つて」

…。まだ、ぐらつと来た…。

越冬隊（前書き）

内容は少ないです。…まあ、これは次への布石って感じなので。
はなしが進むほどにクオリティも落ちてる気がしますが…。

結局、僕はその夜は和夏とメリーの部屋で寝ていた。まあ、体調が悪かったし。仕方なかつた。と自分に言い聞かせたい。目が覚めれば、隣でかわいらしく和夏が寝ていた。

「ラブラブだね」

「ラブラブで何が悪い！」

メリーには悪いけど開き直つてみた。

「…。まあ、いいね。見てて楽しいし。」

「…え？ そう言う反応？」

「え？ そりゃないの？」

「まあ、いいや。そんな風に思われてたなんて意外やね」

「…まあ、私はあんたら見守るって決めたし。」

メリーは、パジャマとして利用…いや、キャミソールの上にパークーを着て、むかいのベットから降りた。

「出かけるの？」

「ちょっと、水とつてくる。要る？」

「要る」

「ん」

とメリーはすたすた部屋から出て行つた。相変わらず、クール。いいなあ～

和夏を見ると、さつきかわらず寝ている。若干乱れている髪の毛を触る。和夏の髪は芯が全くないゆるゆるで柔らかい。わざわざと触り続けている。ん~やらけえ~～～！

「獣は現在も総力戦中…。」

「なんですか。んじや、今日も？」

「いや。訓練」

…。訓練か

「今日こそ一戦闘?」

「獣の群れはどうちも壊滅。」

…。マジか。

僕らは、予想もしてない展開で極東第2地上支部に戻つて来た。僕らは、最初の戦闘で4人を失つて帰つて来た。どうやら、僕らが居ない間に状況は変わつている。

「これから、第6次中部仮設拠点の越冬隊を結成する。」

桐山が、ハキハキッと言う。

「第3小隊。第5小隊。第13小隊、第21小隊は参加。あと、志願する物は志願書を書く事。以上」

中部仮設拠点越冬隊…。極東第2支部名物。これは、地下の部隊も参加する。ホントに、厳しいしどこよりもつらい。

この、部隊派遣の理由としては第3隔壁修復。今まで4回の部隊派遣で下準備を終えたらしい。そして、今回の既に結成式を終えた第5次中部仮設拠点越冬隊は、第3隔壁の穴の外側に展開。獣の侵入を防ぎ、第6次中部仮設拠点越冬隊は修復と隔壁内の獣を狩る。

僕は第6次中部仮設拠点越冬隊で良かつた。心の底から思う。僕はともかく、和夏は本当に戦闘能力が高い。だから、最前線の第5次中部仮設拠点越冬隊に和夏の補助として入れられるかと思っていた。まあ僕が思つてゐるよりも世界は広く、和夏より強い人がたくさんいるんだろう。

「明日後日出撃。まあ、今日はゆっくり休め。」

さちさんは、僕の頭をポンと叩き兵舎へと消えて行つた。

…。どうした物かな。この前、毒の吸い出しやつたし。正直やる事がない。今日は久々にゆっくりとするか。僕は、一人で兵舎へと消えて行つた。

「これより、第6次中部仮設拠点越冬隊の結成式。及び、第5、6次中部仮設拠点越冬隊の出撃式を執り行う。」

極東第2地上支部の支部長を見たのは入隊式以来かもしれない。式は、淡々と執り行われ大隊1時間後には終了した。

そして、準備に入る。越冬。冬を越すだけあるので装備はかなり防寒系だ。まず、パークー。その上にプロテクターそして、コート。あと、レッグウォーマーも使用を認められている。ホントに、レッグウォーマーは有り難い。

装備を整え終え、馬車に乗る。僕は、第14支援小隊に和夏と共に編入されている。最前線から、戦闘小隊、支援小隊、待機小隊、補給小隊。言つてみれば、2番目に危険。なかなかの危険度なのだ。馬車は、既に走りだしている。全部隊を使っての大規模作戦。地下の部隊は基本的に越冬隊に配属されている。

気がつけば、無線では、戦闘部隊への出撃準備を促す無線が流れている。

「戦闘部隊は展開。ただちに、防衛線を展開。絶対に通すな！」

「続いて、支援隊は準備。」

僕は、対獸用刀と槍、プロテクターが装備できているのを確認した。

「出撃！展開急げよ。大砲の準備は早くやれ！」

隊員が降りて行く。

「行こ」

「行きますか」

僕は、和夏に返して馬車から降りた。

初戦（前書き）

遅れですいません。頑張つて、更新速度を上げて行きます・・・

すでに、そこは戦場。僕らは、生存競争に打ち勝つ為に来た。

「砲台設置だ！手伝え」

「了解」

僕は、馬車から、荷物を降ろすのを手伝う。信号弾は止めどなく上がっている。

隔壁の中の守りたい人を守る。それが、僕ら。

「砲台準備完了。よし。設営するぞ！」

今、僕が居るのは最終防衛ライン。今は、設営の人たちが多く投入されているけどあとあとは、補給隊と支援隊が居る。…。他の第3小隊の人は何してんだろう。

「…。抜かれたらしいな。第5、8、14支援隊。出撃！」

無線の報告を受け、僕は、和夏にアイコンタクトをとり戦線へと向かう。

「第14支援小隊は、いま、赤色をあげる奴に続け。」

僕の大体50m先の人人が赤色信号弾をあげた。それと同時に人は集まつてくる。

「よし。今、軽く自己紹介をしておく。さつき信号弾をあげたのは俺。俺はザークだ。一応隊長を務めている。…戦闘に入るぞ。生き残れよ」

赤く染まった獣が迫ってくる。槍を僕は取り出し、一回深呼吸をした。

平野での対獣戦闘は市街地戦闘と比べると生存確率は低い。

「砲火支援が始まる。展開の際は注意しろ」

槍を放り投げ、獣を止める。幸い、高機動型は居ない。まだ、マシか。和夏が僕が止めた獣の背骨をうまく斬った。

次の獣をうまく、背骨を斬る。かなりの数だ。撤退命令が出るまでそれを相手にしなければ行けない。それが、この越冬隊の戦闘隊と

支援隊の仕事。越冬隊に配属されて生き残った、戦闘隊と支援隊の人間は洗練される。

「…。和夏？」

僕は、立ち止まっている和夏のそばへと向かうが、獣たちがそれを阻む。獣たちを避け、一匹一匹懇切丁寧に背骨を斬る。若干、切れ味が落ちたが、気にはしていれない。近くの獣を狩り終わり和夏を見ると、和夏は近づいた獣を斬つていた。あの日みたく、髪の毛を赤に染めながら。

獣の血で、いや血で獣化細胞は活発化される。和夏の獣化細胞は活発化した時に毒素をだす。僕の場合は、活発化した時に和夏の獣化細胞が出す毒を消費する。まったく、もうちょい便利に作つてほしいよ。さんざん、研究材料にしといて。

他の隊員が助けを求めた、が僕は見た時には体が半分なくなつていった。僕は、正面から獣を斬る。喰うか喰われるか。

次々と、人が死に。次々と獣も死ぬ。

大体、1時間経つただろうか。その時に、静かだつた無線から撤退の命令が流れる。気がつけば、コートは真っ赤。そして、槍は0。対獣用刀も刃こぼれしている。そう言えば、和夏はどこだろう。

「みなど。退こう。」

後ろを振り返ると、真っ赤な和夏が立つっていた。

「そうだね。」

僕は、背後に迫つた。獣を避け、背骨を断ち斬つた。

「さちは…。なんでそんなに…平氣な顔をして…いる…」メリーは、息を切れ切れにして言つ。するとさちはいつものテンションで

「まあ、慣れだよ。2回目だし。まあ、軽傷ですんでよかつた」と言いながら、メリーの傷の手当を終える。さちは、もともと衛生兵なのでメリーの折つた傷くらいはすぐに手当をできた。

「しかし、あいつら遅いなあ。」

「…和夏と…湊か?」

「まあ、他は帰還と死亡の報告が入ってるけど。」のあとで、また、部隊を結集するしね。」

さちは、ウエストバックから文庫本を取り出しメリーに渡す。

「どうせ、暇だろ？ 寝てる間。時間つぶしに貸すよ。」

さちは、そう言つてメリーの手を握つて、何かつぶやくと他の負傷者のもとへと向かった。

文庫本のタイトルは、探偵ガリレ。…なんだこれ。この本だろう。とりあえず、かなりぼろぼろなので随分古い本だらう。…私、手を怪我してるから読めないじゃん。今更、気付いてしまった。

僕は、結局和夏を背負つて中部仮設拠点へと帰つて来た。まあ、なんとかだった。

「お～。生きてたか？」

とさちさんが和夏をおろすのを手伝いながら言つてくれた。

「まあ、一応。血まみれですけど。」

「和夏は？」

「多分、負傷なし…でも、毒が分泌されてると思いますけど。」

「…分かった。まあ、メリーも怪我してるし同じテントにいっか。」

さちさんが押すベットの上には和夏がぐつぐつと寝ててゐる。まるで死んだかのようだ。脈はあるけど。

「うい～。元気？」

「…そんなに」

「だよね」

僕は、一人でテンションを落としつつ部屋にある椅子に座つた。とりあえず、君等が生きててよかつた～とさちさんは、僕の頭を叩いてテントから出て行つた。

「よかつた。」

「…。こつひよかつた。」

ウエストバッグから、取り出した水筒に口をつけながら言つ。とりあえず、「コートは脱いでいるけど。髪の毛とか、ズボンには血が付いたままで、やつきの事がフラッシュバックする。

「和夏は……？」

「多分、疲れているのと毒の影響かな」

「…。赤。」

…。髪の毛の事だらう。ホント、この髪が赤く染まるのはなんだか好きじゃない。

「湊の目が…」

「ええええ？？？」

僕の目は茶色のはず。意味が不明。意味不明。摩訶不思議？世界七不思議？

「いや、茶色か」

「ふう…びっくりしたよ…」

本当に焦つた。今時珍しい、日本の純血とロシアの混血なんだから。まあ、日本人らしい面は目だけだけども。髪はなぜか、変な感じに金色。髪質は女子が結構つらやましがる、超ストレート。

「…ふふ」

…珍しいね[冗談なんて]

ちなみにメリーは、バリバリのロシア系。なんで、目は青色。髪は黒いけど。

「まあ、時にはね。暇だし。」

そう言つと、メリーは急にベットから、降りてスリッパを履いた。するとすると、和夏の寝ているベットによるとにやりと笑う。そして、怪我をしていない方の手の指を不気味に動かす。指が別の生き物みたく、別々に動いているのだ。

「やああ…！」

「…喰らつたか！」

とメリーは自慢気に僕の方を見る。そして、やつきの悲鳴は和夏の物。

「また、下らぬ物をくすぐつてしまつたか…」

「ヤリと次は親指を突き立てた。

「…。いやあ全く…大丈夫?」

少しばかり、くすぐりを喰らつた和夏を心配して立ち上がる。

「湊お…」

目を潤い付かせた、和夏が僕の方を見る。正直、ヤバいぐらい可愛
い。

メリーの方を再び見ると、また指を立てた。…。なんだよ、全く。

「…起きてたの?」

「起こされた…。」

すこし、ムスッとした表情を浮かべている。

「痛い所はない?」

「ない。心は痛い。」

…。

「分かつた」

また、下らん事を聞いてしまつた。

星（前書き）

お待たせしました。元旦付近は上りでかなり混雑です。
冬休み終わるまでに終わるかなあ…

僕は、シャワーを浴びている。まあ、開いている時間のうちに血は落としておけつて感じだつたのでよーくよーく洗つている。

蛇口を捻ると、中途半端に暖かい水が降り注ぐ。若干、赤い水が排水溝に流れしていく。

「生き残つたんだ…」

もう一度、シャンプーをして僕は、体に付いた水を拭きシャワー室から出た。こう思つと、中部仮設拠点は、仮設つて付く割には施設は充実している。

「あれ？ 先輩？？ 生きていましたか！」

とユーリが隣のシャワーから出て来た。絶対、コイツ待つてたな。そんな気がする。

「お前こそ、生きてたか」

僕は、ぺたぺたと私物を容れたロッカーに行き、服を着る。

「僕は、出撃しなかつたんで」

ユーリは苦笑しながら、僕を見た。まあ、支援隊は今日は大概の隊は出撃せぬじまいらしい。

「よかつたじやん。一日目を生き延びて」

支給品の黒のTシャツはなんとなく、青色のTシャツよりも着心地が良い気がする。これは、僕の偏見かもしれないが、とにかく僕はこう思つていてる。

「先輩。黒いTシャツって私物？」

「いや。青いTシャツ嫌いだから、補給隊の知り合いにまわしてもらつてる。」

パークーと、コート、機能的なTシャツと言われている奴を回収BOXに容れて、ユーリの分の水もコップに入れれる。

「マジすか！ なんなんですか、黒いTシャツの利点って」

「まあ、落ち着け。若干着心地が良い気がするぐらいだ。」

僕は、水を渡し自分の水を飲み干す。

「へえー。そう言えば、兵舎分かつてますか？」

「さつきまで、医療テントに居たからな。全く知らないな。」

「では、連れて行きますよ。確か、男子は第3小隊で一部屋使つら
しいです。」

「ということは、コイツとさちさんとかと一緒に…。僕は、自分のプロ
テクター回収BOXに容れ、無線機と対獣用刀、槍容れをもつてコ
ーリを追いかける。無線機では補充人員が隔壁の上の鉄道で到着し
たということを伝えていた。」

「そう言えば、武器類はどうするの？」

「え～っと。そこで新しい刃と槍、プロテクターと自分のパークー、
高機能Tシャツと「一トをもらつてください。」

「お～。サンクス。」

僕は、補給部隊のお方に新しい刃に変えてもらい、備品を頂いた。

「しかし、刃ぼろぼろですね。」

「… そうかな。和夏とかもつとぼろぼろだった気がするけど」

あと、さちさんは、折れてたかな？

「マジスカ！-しつかし、やつと休めるし。しつかり寝るとしまし
ょうよ」

「そうだな。」

「おはよう

「…。なんで？」

「なんとなく」

僕は、気がつけば和夏の太ももの上に頭が置かれていた。…。よし、
まず昨日の寝た状況から確認だ。僕は、ヨーリが容れた脱脂粉乳を
飲まれた。… それか。それだな。絶対、あいつは既に和夏の駒だ
つたか。

「なんかした？」

「…。それは……。」

もういいよ。大体分かつた。体を起こして、僕は、大きくあくびをする。

「んで、今日の任務は?」

「夜だつて。夜の間の警戒任務。」

メリーガいつも感じで部屋に入つてくる。女子は、比較的小さい部屋に2~3人で使つらしい。本当にこのシステムでよかつた。

「まあ、訓練あるし。着替えてこいよ

「ラジヤー」

敬礼をして、僕は部屋から足早く出た。

服を着替えて、たまたま部屋にいたヨーリの首を絞めつつ、たちさんを追いかけた。

「しかし、今日も冷えるなあ。」

「確かに、気温が10℃以下からグローブ使用できますつけ?」

「そうだつたかな。」

しかし、コイツ首を絞めてもなお会話するとは、ある意味すごい。

「今日は、ロープ降下と隔壁を上る訓練。まあ、言つてみれば腕力の上昇かな。」

「お~」

「…。」

僕からすれば、腕力なんてなにそれレベル。まだ、前と比べたら少しはマシかな:

「ロープ降下は慣れたもんだろ?」

「慣れてはないんですけど。やつた事はあるレベルです。」

と僕はロープをつかみ、素早く降りる。手が痛い。グローブをしたけど。

和夏が僕のあとに続いて素早く降りて來た。

「…。上のコツは?」

「…知りません!」

「ええ~」

知つていたら僕はおかしい。思いつきり、幼少期は羊とかヤギを追い回していくぐらい。まあ、犬の代わりにだけど。

「さて、全員降りたね。次は上がる。：まあ、簡単だよ。スパイクの前の歯を壁に少し刺しそれに少し体重を掛けつつ、ロープをたぐり寄せる。」

見本を…と言つて、たちさんが上がりで行く。しかし、うまい。見る見るうちに上りきつている。

「よ～し。あがつてこーい！」

…。めんどくさい。多分僕からなんだろう？と回りをみるとみんなに指を指された。

「いきます！」

僕は、ロープをつかみ、スパイクの刃を蹴り込む。必死にがんばり、僕はなんとか到着…。

「はい。平均。よくやつた。」

結構疲れた。いや、上るなんて嫌いだ。

「さすが、早いね。」

和夏が何喰わぬ表情で僕を見る。

他の隊員もみんな上がつて来た。

「これで全員だね。んじゃ、ここで、報告」

若干テンションが下がったたちさん。

「え～と第3小隊隊長に僕がなります。んでもって、一部隊あたりの人数を減らすらしいです。それで、いま、生き残っている。僕、和夏、メリ一、湊、コーリと新しく入った。新山アヤネさんです。」「第1・2小隊より配属されました。新山アヤネです。よろしくお願ひします」

と結構身長が高いお方がぺこりとお辞儀した。さっきから、コーリが少し顔面蒼白だが。…無視だな。あと、僕より身長が高いのも無視しよう。そうしよう。

「あと、副隊長は、湊、よろしく」

「…分かりました。」

右側第一波の地点に早期警戒任務中。

「特に居ないね。」

「気配もありません。」

早期警戒任務は、夜間任務の中では一番危険。獸が出てからという物の、天文学者は年を追うことに星が綺麗になつて行くと言つている。正式には関連性はないらしいけど、一ついえるのは人間の出す二酸化炭素の量は激減している。

「そう言えば、君たちの階級が上がった事を言つたっけ?」

「言つてないですよ。」

「和夏とメリーガ兵長。みなとは、伍長だつて。」

「なぜに、僕が伍長?」

「狩つてる種類は、猿とか第2種危険獸が多いからだつて。」

なるほど。確かに、猿の背骨を折つた感じの回数が多い気がする。

『地上強襲部隊第3小隊応答せよ』

『こちから、第3小隊。どうぞ』

さちさんが無線に応答する。無線連絡があるといつ事は、近くに何があるのか?

すこし、神経を尖らせる。

「西側で交戦しているらしい。まあ、そつちも氣をつけろつてことらしい。」

「まじですか〜…。」

「…大丈夫。あなたは私が守るから」

アヤネさんそれ…。なんか聞いた事があるよつな。

「信号弾。確認。赤です。」

『こちから、地上強襲部隊第3小隊。現在、早期警戒任務中。北東方面にて、赤色信号弾を確認。指示をお願いします。』

双眼鏡で遠くを見ていたメリーの報告を受け、さちさんは素早く本部に報告している。

『他の隊からの報告も上がっている。一番近いの君たちだ。後方に

居る部隊に早期警戒はまかせて、向かってくれ。多分、その部隊は、
補給物資を積んでいるはずだ。急いでくれ。』

『了解。救助に向かいます。』

「いまから、補給部隊を救助に向かう。」

「はい。」

みんなが返し、さちさんは走り始めた。

大体、10分走った所で補給馬車と思われる残骸のもとにたどり着いた。

「人の反応は？」

「一人。」

僕らは、対獣用刀を素早く引き抜き展開したが、アヤネは、若干分かつてない。しかたないけど。

「和夏と、湊で中央いけよ。」

僕は、和夏にすこしアイコンタクトをとり、和夏を少し待つて後ろを追いかけた。

和夏が残っている人のもとにつけた時には、獣は居なかつた。唯一残つた、隊員は涙でぐちゃぐちゃになつて、獣の背骨に対獣用刀を刺していた。

「…。どうやら、君だけか。」

僕は、さちさんの指示のもと壊れた補給馬車の上で、回りの警戒をしていて。メリーは、もつて来ていたコーヒーを生き残つていた彼女に飲ませている。和夏は…。

「寒い。」

と言つて、僕に抱きついている。正直、あつたかくてうれしい。

『はい。回収部隊を待てば良いんですね。』

「和夏。」

「なに?」

僕は、ウエストバッグから、水筒をとり和夏に渡した。

「紅茶あげる。」

「ありがと」

今日も星が綺麗だなあ

回収部隊は、夜明けぐらいに到着した。そのあとは、残ってる物資と僕等を運んでもらつた。

だいたい5時間。仮眠をして、僕らは待機中だ。

「出撃？」

「そう出撃。」

「…。」

「…大丈夫わたし」

「行きましょう。さちさん。時間は金です！」

事前に止めよう。

まあ、任務は、至つて明快。サイタイプを中心とする群れを蹴散らせば良いだけ。

素早く、作戦域へと入った。

「…。前方ですね。」

「よし。和夏とメリーセンターにその後ろに、みなと。右側はユーリとアヤネ。行け」

僕は、和夏とメリーセンターが走つて行くのを確認して、それを追いかける。猿を2人でつぶしたのを確認して、サイタイプに投擲爆弾を投げた。そのあとで、うまくメリーセンターがサイの背骨を折つた。が

『さちさん』

『分かつてるよ。あれは、止めれる量か？』

『無理でしよう多分。』

少し、ため息を吐いた。

「あの大群をどう用意しただよ」

迫つてくる、超大型の獣を中心に突き進んでくる獣たちへとつぶやいた。

星（後書き）

誤字脱字あれば、報告お願ひします。
感想…あればよろしくおねがいします。

三日三。 (前書き)

多分、今までで一番短いです。
年が明けるまでにもう一話行きます。

『しかし、地上強襲部隊第3小隊。目標はつぶしたが、超大型獣を中心とした大規模な群れを確認。』

『後方隊も確認したらしい。君たちは、即刻その地点から退却。補給を一度受けてくれ。』

『了解』

「退くぞ！…」

数は、不明だが、圧倒的な量だ。けものたちは一度止まっているらしい。理由は不明だが。

「狩獵者よりも多いぞ。あいつ等」

僕らとは、入れ替えに出撃して行く狩獵者が吐いた言葉。人は神が下した事に反抗してる。そりや、神に従う物が人以外なんだから多いに決まってるよ。さちさんについて行き、テントに入る。外は雪が降り出している。

「寒い。」

「そうだね。」

メリーは和夏に和夏は僕にくつついでいる。

「相変わらず、ハーレムだねえ」

さちさんは、タバコを取り出し火をつけ外に投げた。
なんかの儀式らしい。よく知らないけど。

「お母さん。お父さんは？」

「お父さんは、私たちを守る為に出かけて行つたの」「なぜか、この時のおかあさんの表情は忘れられない。」

なぜか、さちさんの顔を見ていて急に思い出した。あの表情をしているのだ。

「田中隊長。会議です。」

「はい。」

とせちさんはテントから出て行った。

「もう言えば、アヤネさんはユーリとはじつに恋の関係? 僕は、ウエストバックから携帯食料を取り出した。」

「永久の愛を誓い合つた。」

「ただの腐れ縁ですよ」

ユーリは早めにアヤネを止めた。

「そう……ですか……」

あんまり、面白くなかった。残念。多分、そろそろ出撃だらうな。そんな事を思いつつ、ため息を吐いた。

「あと、10分!」

さちさんが、補給部隊へと叫ぶ。僕は、ただいつものように補給車の上で探索をしている。

僕らの隊は、主な任務は警備らしい。

「設置完了!」

「了解。撤収しましょう!」

さて、任務終了か? 3日目も生き残れた。多分。

「今日の任務は、なぜか現れたサイタイプの獣、5頭を狩る。流石に僕らだけじゃ、無理なんで第1・2小隊と合同で行います……ぱちぱち」

「おおお……！」

とユーリ今までテンションが上がった。確かに、第1・2小隊は、美人のみの小隊になつたらしい。（よく知らん。）

「……うるさいいね。」「

「ん

メリーやは、どこからともなくもつて来たヘッドフォンを装着して、僕に返答した。

和夏は、完全に寝ている。まあ、仕方ない。今は夜の3時台。最近は、補給部隊の手伝いと叫うなの休暇をとらされていて結構、地味に筋肉痛がうでにある。

「……さて、ユーリが変にテンションが上がり気持ち悪いけど、続きを言つと。この任務は、結構重要なので特別報酬が出ると、そして、エース隊の第1・2小隊が手伝ってくれる訳です。」

「……先輩。お……置いて行かないでください……」

作戦準備を行う。最近は、自分の家に戻れてなくて結構、心配だ。特に、あの猫の抱き枕。なんか、高かつたし盗まれてたらいやだな。

「戦闘評価書をみて、この布陣にしましたが。それほどどう思つ。」「

「ユーリと、和夏はそのままで良いよ。だけど、ユーリはサイドこまわしてもうつて良いかな。」

「分かりました。そのくらいで？」

「他は大丈夫だよ。適応能力高いし彼。」「

「では、行きましょうか。時間は迫っていますし。」「

「そうだね。」

「第3、12小隊出撃。」

さちさんは、走りだした。トップはさちさんと第12小隊の隊長さん。

そして、なぜか僕はトップ下。主に、高速戦闘布陣で言えば、トップが探索、牽制。トップ下が、どどめ。一番、綺麗な流れで言えばだが。

この、女子率の高い状況にユーリはちょっと変な顔をしている。非常に残念ながら、幼少期は女子が多い所に居たので慣れてる。まあ、他の男子とは違う。多分。

サイが見えたと同時に走つてくる。あいつ等は、進化しても脳味噌筋肉らしい。

さちさんは、ぎりぎりで煙幕を撒いた。まあ、サイはあまり視覚に頼つていないので気休め程度かもしれないが。

「一匹討伐」

報告と共に、地鳴りがした。

僕は、サイの背中に乗り、槍を刺そうとするがなぜか、体が動かなくなる。そのまま、地面へと真っ逆さまに落ちた。

目を開ける、この行動が非常に重たく感じた。なんだらう、この重さは。ピッピッピと機械の音が鳴つていて。僕の回りには知らない機械が囮んでいる。

「意識が戻つたようだね。」

と澄ました顔の男の顔が僕の目の前に現れる。

「…久々。」

「久しぶりだね。」

とにかく笑う。この、澄まし顔の男こそ僕に投げられた細胞を開発した男。というか、なぜここに。

「なんで、第2支部に？」

「いや、君は約一週間寝ていてその間に、君の獣化細胞を研究した研究所へと搬送されたよ」

「だからか。この機械があるって言うのも。」

「そうそう。寝ている間に隈無く検査したよ」

「んで、なんか分かったの？」

「そうだね。まあ、まだ全部結果が出てないから言わないでおくれよまあ、いつも通り。大体、この人はちゃんと結果が出るまで何も言つてくれない。」

「そうですか。」

「君も、また作戦中に意識を失つなんてね。不運にも程があるだろ。」

「知りませんよ。あんた等のミスと違つんすか？」

「いやあ…まさか、まだ毒の事。根に持つてる？」

「キスで毒を吸収する。これを発案したのはコイツらしい。まじで、配慮を持って！」

「…。」

「…はははは～」

ジと田で見ると疲れたし、そろそろやめた。

「和夏は？」

「多分、今週末…だから明日か明後日には帰るんじゃない？」

「そうですか。」

「ま、今日の夕方に検査結果出るから。おとなしくしてけよ」

「うう…」
そう言って、澄まし顔は出て行った。たく、いつもながら子供扱いだ。特別、この重い体をあげる元気もないのに僕はもう一眠りすることとした。

「起きる。28200001」

僕は、くわあ～とあぐびをする。

「みなど。よく寝るなしかし。」

「しらん。体が眠りたがってる。」

「冬眠か？？」

「ニヤニヤ笑う。澄まし顔。めんどくさいな。

「あ～そうだ。用件の検査結果。精神汚染は陰性。肉体的獣化汚染も陰性。だけど、一つ異常が。」

「い・・・異常？」

「獣化細胞が不活性化している。他のN282細胞被験者には見られていない事だ。そして、なぜかN383細胞が体内に入っている。」

「N383細胞が？」

「普通は女性にしか適合しない。まあ、それに関しても君も男だから適合しない。体内に入っているN383細胞は、和夏の物だつた。」

「…。なんで？」

「いや。じつちの台詞。まあ、とりえずはしにやせん！」

「死にはしないんですね。良かつた。」

ときどき、語尾がにやになりるのは変わらんか。

「まあ、実に厄介だけど。多分、和夏に問題があるんだよね…。」

「というか、この体がむつちゃ、ダルいのは？」

「薬の副作用。今日は多分ダルいままだと思つ。」

和夏が来たのは結局2日後だつた。まあ、今和夏の検査をしている訳で。僕は、澄まし顔と待つてゐる。

「しかし、和夏ちゃんは大人な感じになつたねえ。」

「そうすか？」

「絶対、もてるね。」

「そう言つ話のときは元氣ですよね。」

「よく言われるよ」

と澄まし顔はタバコに火をつけた。

「しかし、お前は良い狩猟者になつたらしいじゃん。」

タバコの煙が風に乗つて流れて行く。

「評判すか？」

「まあ、そんな所だよ。昔の知り合いが第2支部に居てたや。」

ドアが無造作に開かれ、和夏が入つてくる。その後ろには、佐々木さんも居る。

「また、タバコ…」

「…。すいません」

澄まし顔はばつが悪そうに携帯灰皿にタバコを入れた。

「検査結果は、まあ言つまでもなかつた。」

「んじや、僕の仮説どおり？」

「そう言つ事になるね。」

と、検査結果のカルテを佐々木は澄まし顔に渡す。カルテを読む時だけは、研究者に見えるな。そんな超個人的な感想をもつ。

「元気だつた？」

「はい。おかげさまで。」

「まあ、君も大きくなつたね」

「そうですか？」

「身長というよりも、背中が？」

「精神的にますか？」

「そうだね。まあ、これなら安心して和夏を預けれるね」

と佐々木は和夏を見る。僕は、和夏を見るがいつもより少し元気がない気がする。検査に疲れたんだろうな。

「大丈夫？」

「結構きついね。だつて、みなど成分が足りない。」

…。元気だな。和夏は大丈夫だ。澄まし顔は、カルテを読み終えたようでコーヒーを飲みきった。

「とりあえず、これから治療は。みなとは、N383細胞の機能停止の処置は終わつたから。あとは和夏だね」

「そうだね。まあ、処置は非常に難しいけど。まあ、とりあえずは投薬で処置して行こうか。あんまり、配属している部隊に迷惑かける訳にもいかないし。」

「いっそ、第2支部に行っちゃおう!」

と澄まし顔は眞面目な顔で、佐々木さんを見る。佐々木さんは言つたかもしないが女性だ。うん。そしてかなりカッコイイ。

「まあ、そうか。確かに、第2支部には温泉もあるらしいし。N282とN383の被験者は実質ちゃんとした被験者は湊と和夏だけだしね。」

「…。来ちゃうのか。まあ、良いけど。」

「さて、君等はそろそろ、電車来るけど。帰らないの?」

「今日帰るんですか?」

「そうだよ。荷物ないし。さっさと行った。」

半ば、追い出される様な形で研究所を出た。しかし、IJIは、大何支部だつたけな?忘れてしまった。

まあ、和夏に付いて行けば大丈夫か。僕は、勝手に納得し和夏を追いかけた。

「…。」

「…。」

「…。」

支部間の移動方法は電車のみ。それがまた、実に長い距離…。一度、本部で乗り換えが必要だし。

「喉がわいた」

「ん」

僕は、素早く澄まし顔からもらった水を渡した。

「眠い。」

「寝ておいて良いよ。起きとくじ。」

「んじや、遠慮なく。」

「…。しかし。暇だなあ

「…。ウオオ…かなりできてる。」

門の完成度がやばい。結構出来上がっていい。

「そうかな。結構、遅くなつてるって聞いてるけど。」

「へえ。まあ、一週間もいないとびっくりするよ」

「…。今日、訓練終つたら…」

「おお～～！先輩！大丈夫ですか」

和夏が何を言おうとしたが、ヨーリの声に書き消され分からなくなつた。

「まあ、一応。」

「みんな心配してたんすよ！…」

「そう言えば、みんな無事？」

「みんな、生きてますよ。」

「そつか～よかつたよかつた」

そのまま、流れで部屋へと入つて服を着替える。

「訓練か～久々だな～」

つぶやくと同時に警報が鳴つた。

一〇四〇（後書き）

年越しに間に合つてよかったです。
では、良いお年を

21日。復帰。（前書き）

あけまして、おめでとうございます（＝－＝）三
昨年から、年を越してこの小説を書き続けれ
ておると書つ。何とも
うれしい。
まあ、勝手にすげえ。
では、どうぞ

21日目。復帰。

僕は、すぐに装備を着用する。いくら、病み上がりとは言え人員の足りないから待機という事にはならないと思つ。

「先輩。」

「大丈夫。準備は終つたよ。どこに集合?」

「東側の司令部らしいです。」

「りょうかい。」

ユーリのあとを僕は追いかける。東側か、旧市街地が広がつていて結構戦闘はしやすい。素早く、司令部についてさちさんを待つた。しかし、さちさんについてはもう少し休むべきだと思つ。強襲部隊の仕事をしながらも、医療隊の手伝いもしている。

「元気?」

「はい。さちさんこそ、元気ですか?」

「大丈夫だよ。僕は、結構休んでるし」

そう言って、人数を確認したようだ。

「全員居るね。んじや、状況を説明する。」

そう言って、司令書を開いた。

「今、第5部隊の方にいた獣の群れが急に攻撃して來たようだ。まだ、こっちの群れには動きはないがいつ動くかわからない。そこで、僕たち、第3小隊は急遽、群れから旧市街地で一番近い位置に補給場所を確保する為に付近の獣を狩る。」

「どのくらいですか。投入する戦力は?」

「2小隊のみ。他は、警戒任務中だ。」

「…。獣の数は?」

「それほど居ないと言われた。」

「…厳しいですね」

みんな、険しい表情を浮かべる。正直、危険すぎる。

「装備確認。」

「了解

僕は、和夏の装備を确认する。

「よし。出撃。」

この言葉で、みんなは地面を蹴った。正直、誰もがこんな任务をしたくないと思う。だけど、やつてくれと言われたら、断れない。この戦場にいる人はみんな守りたい者が居るもしくは、したい、かなえたい事があるんだ。

「探索開始。」

音を确认して行く。

「目標点発見！」

「回りに音源3」

「了解！信号弾縁をあげろ」

僕は、太ももについたホルスターから取り天に向けてトリガーを引く。

「正面に獣！」

ユーリがうまく処理する。なんとなく、ユーリが頬もしく見えた。が。

「後ろ！」

あやねが叫んだが真っ赤な飞沫が上がる。死んだ？いや…

「つち。囮まれたか！？」

対獣用刀を遲いが引き抜く。そして、聴覚に神経を集中させる。「それほどの数は居ない様ですけど…他の隊らしい音はしません」

「…。」

『こちら、強襲部隊第3小隊。第5小隊応答を…』

更に、数の絞り込みをはかる。4?5?。

「つち。応答ないか！」

「…。数は？」

「5ぐらいは居る。最悪の場合は」

5体。ユーリを失った今、僕らは、5人しか居ない。キツい。

「私無理です…戦えません…」

「…。」

あやねは、座り込んだ。戦意喪失と言つた所か。

「…。戦わないと死ぬぞ。」

「…。いいです」

「…。そうか。なら、退いてくれ。」

「…。退きたくありません。死にたいんです。」

「死んでもらうのは困る。お前が喰われる事によつて血のにおいが更に広がる。そして、獣が更に集まる。だから、逃げるなら足手またいになるな。他の奴の守りたい者、成し遂げたい物への思いの邪魔をするな。」

さちさんは、対獣用刀をしまい、槍をあやねに向けた。

「逃げる。じゃなかつたら、戦え。逃げなくて、戦わないならお前を今、殺してここでえさとして使つ。」

あやねは、立ち上がりふらふらと僕らが来た道を歩いて行つた。

「…。はあ。めんどくさい」

「…。どうするの?」

メリ一は、こいつになく寒そり。

「…。頭脳戦でしょ」

「さちさんの言つ通りに、仕掛けたけど。大丈夫かな。」

「大丈夫だよ。僕も納得の上だから」

僕は、さちさんにもらつた。爆弾を仕掛ける。まあ、昔の爆弾よりは遙かに爆発力は落ちたそうだ。

『仕掛け終わりました。』

無線で、報告し和夏と共に近くの建物の上に上がる。

「さて、どうかね。」

「…。結構、居るね。気配がびんびんする」

「！」まで、気配と言つか殺氣を出されると、いつも平常心じゅう居られないね。」

僕は、和夏が対獣用刀を引き抜いたのを確認して言つ。

「まあ、仕方ないじゃん。私我慢できないし」

「確かに、言えてるね」

すこし、苦笑して言つて置こう。僕も対獣用刀を引き抜く。市街地機動は超得意分野だ。しかも、久々なんで結構楽しみだ。楽しみとかいつてるのは不謹慎だが、今の状況を楽しもうとかしないと気が気でない。死ぬ可能性の方が高いんだから。

『ひとつちも、仕掛け終わつたよ。んじや、補給場所として確保した場所に集合』

僕は、この指示に従い、和夏と共に補給場所目掛けて走る。

『爆破許可』

『了解』

僕は、渡されていた爆破装置を押す。ドン！と赤い火柱が一瞬上がる。押したのは良いけど、ヤバい。爆弾の上を僕らは走つている、まけものを燃やす為にだけ。つまりは、僕らを追いかける獣を爆弾に追わせる為だ。

とにかく走つて、走りまくつている。

結構、獣が後ろからきてる。

早い！速すぎる。爆発がだけど。

さつきの爆発で、獣が一体吹き飛んだらしい。ものすごい、鳴き声が聞こえた。

「あと、1k！」

こんな、疲れる作戦しかないとか。

まあ、今の状況ではこれしか無理だけど

次々と獣は爆発に巻き込まれていて。しかし、獣はなぜ、こんなに人を見つけると喰おうとしてくるのか。

「あと500M！」

和夏は、僕の声を聞いて、後ろをちらつと見た。ここで、僕も後ろを確認する。あと、半分は削れるんじゃないだろうか。

そんな、推測をたて、続きを走る。

『ラスト！』

最後の爆弾が爆発し、僕と和夏は、停止した。居ない。まさか、全員やれたか？

煙が退くと、獣の死体が一體転がっていた。おかしい。明らかに数が足りない。

「…状況はよくなさそうだ。」

僕は、そう言って対獣用刀を引き抜く。

「そうだね。」

いや、いくら生存確率が高い部隊だからって死ぬときは死ぬよね。ここまで、敵が多いと恐怖も何も感じない。むしろ、落ち着いてる。

『そつちの状況は？』

さちさんの声が無線機から流れた。

『状況は最悪です』

そう返して、僕は、地面を蹴ろうとした。が、すでに和夏が飛び込んでいた。

僕は、それを追いかける形で走りだす。

槍をまず、目の前の獣に投げる。いつになく刺さりが良いな。この獣の肉はやうかいのか？

「みなど！」

「ん。」

僕は、素早く投擲爆弾を取り出し、和夏の指差した方向に投げる。しかし、結構疲れる。

『こつちは、状況終了。支援に向かう。信号弾黒をあげる』

『了解。3、2、1』

僕は、筒口を上に向け、トリガーを引いた。ポンっと言う非常に軽い音が鳴り、黒い煙が上空にのびて行く。

『確認。急行する』

僕は、隣に居た獣を蹴り、槍を首に刺す。すばやく、後ろに来た獣に斬られたが、そこはプロテクターの守備範囲。着用していてよかったよ。お返しに、首を切り落とす。

血を浴びた。和夏はどうしているだろう。回りに獣が居なくなつた

事を確認して。

建物を上へと行き、他の獣を位置の状況を見る。なんだろう、このいやな感じは

「みなど。どう？」

「…。どうって何が？」

和夏は、対獣用刀を鞘に納めて言う。

「…ああ。速いね。さすが！腕をまた上げたね」

「いや、そこもあるけど。状況は？」

そつちか。なかなか、難しい人の気持ちを読むのは。

「良くない。まあ、しっかりした探知は出来てないけどね。」

『コチラは、状況終了。』

「あらら、着いちゃったのに」

「お速いね」

「ユーリの『』がらは回収したよ。あとは、僕らはここで待機。ここに展開する補給隊待ちだね。」

「そうですか。」

「さて、ポイントに行こうか

また、死んだ。人が。

21日目。復帰。（後書き）

誤字あれば、報告して頂けるとうれしいです。

「激務続きで悪いが。君の隊は実に有能な人員がいる。」

「そうですね。生存率は高いです。」

「君は、これから新人の補充兵の隊を担当してくれ」

「わかりました」

…。新人の補充兵の教育か。まあ、元々第3小隊はそつと隊だけどね。

「…。異動ですか。」

「そうだ。メリーは、第4小隊の副隊長。和夏は第12小隊。みなとは、第2救助隊。まあ、別れてももとは同じ隊だ。一応、今日までがメリー、和夏、湊の新兵期間は終了。今まで、よく生き残った。最後の命令はこれからも生き残れ。これは、バリエ隊長の命令でもあります。」

と言つて、敬礼をする。僕も、さつと敬礼をした。

新兵期間か。短かつたよくな。長かつた様な。

「そう言えば、あやねは？」

「行方不明だ。原隊復帰は確認されていない。」

「そうですか。」

「さつさと、新しい隊長に挨拶にいけよ。」

そう言つて、さちさんは立ち去つて行つた。

「…。んじや、私は先に行くよ。また、会おうじゃないか。まあ、どこで会えるかはわからないけどね。」

「そうだね。また、いつか。」

僕は、メリーと握手を交わす。僕は、なんだかんだ、部屋での片付けに一番手間取つている。まあ、変に私物をまとめてなかつたせいで。

「さて、行くけど。一緒に出る?」

「…。」

和夏は、何も言わずにうなづく。2人で、何も話さずに兵舎を歩く。そう言えば、この兵舎をゆっくり歩くのなんか初めてかもしない。大体は小走りで、兵舎から出る。丁度、出口の所で、第12小隊と第2救助隊は真反対になる。

「んじや、また。」

「また、会えるよね。」

「まあ、研究所とかで会えるよ。」

「そうだね…。んじや、また」

そう言つと和夏はにこっと笑い、歩いて行つた。

僕は、和夏が歩いて行つたのを確認して、歩き出した。生き残れ。この命令を胸に刻んで。

「第2極東地上支部強襲部隊第3小隊より、参りました。美作湊です」

「お。期待の新人。僕は、第2救助隊隊長の矢崎だ。うちの隊は激務だぞ。うちを含めて六つの救助隊があり、1日に一つの隊が休日。他は、訓練をしたり、して待機。今日は、まず他にも入った2人と共に、救助用バイクの使い方だね。」

と、二コ二コしてミーティングルームから出て行つた。

「…。あ。よろしく。一緒に隊のローラーです。私も今日配属されました。」

「よろしく、美作湊です。」

「お前が、第3小隊の湊とかいう奴か…。」

「…そうだけど…顔近い…」

僕は、男には興味ないし。和夏にしか、興味はない…なんとなく、心でバカツブル発言をしておく。

「俺は、チャン・ボンウォンだ。第1小隊の若きヒースの…！」

「…。いや、知らない。」

「お…おまえ言つてくれるな…」

「知つてた?」

「知らないよ。私は」

とローレーナも味方の様。まあ、あんまりダラダラしてると怒られるのでさつさと僕は部屋から出て行つた。

外に出ると、隊長がバイクの調子を見ていいる。といふか、何気にバイクを見るのは初めてかもしない。

「よし。来たね。期待の新人たち」

と矢崎は笑い。バイクのエンジンを停止させた。

「救助隊の任務は、救援を求めた部隊のもとにいち早く到着する。そして、救援を求められた目的を排除、または救助をおこなう。いち早くつてことで、このバイクを使用する。基本は、一人が運転。もう一人は戦闘員として、後ろに乗る。そして、目標地点付近で戦闘員をおろし、比較的安全と思われる最も近い地点でバイクは一旦停車。そして、戦闘員の要請に合わせ、行動する。」

「…つてことでバイクの使用練習?」

「そう。バイクは絶対使うからね、この隊に居る限り。」

バイクの使用方法を一通り教えられ、バイクにまたがる。アクセルを捻り走りだす。

ゆっくりとカーブをこなす。

「うまいね~。乗つた事あるの?」

「自転車には乗つた事はあります」

「自転車?めずらしいね」

まあ、澄まし顔に乗らされた。

『はい!』

と矢崎は無線の問いかけに応答する。

『了解。1チームのみですが…』

「よし。お前等はこのまま、バイクの操作練習。俺は任務に出るから。バイクには乗れるようになれよ今日で。」

と言つて、矢崎は、ヘルメットをかぶり倉庫へと行つた。

「飯行くぞ！ 飯！！」

と、矢崎はみんなを食堂へと連れて行く。

「適当に注文しろ！ おごりだから」

「まじですか！ アザース！」

「ありがとう！」ぞこます！－！ 頂きます

僕は、なんとなくカツ丼を頼みそれを、隊長が先に待つていた所に座り他の人を待つ。

「よし。全員だね。んじゃ、いただきます」

「いただきます。」

みんなが、食事を始めた。

久々に食べたカツ丼は普通においしい。

「うちの隊、今一人が支部で治療中でね。まあ、普通なら3つのチームに分けるんだけどね。今は、2チーム体制ですよ。」

「ボンウォンは、俺と組んでくれ」

「わかりました」

そう言つて、ずっと食べ続けるボンウォン。しかし、よく喰うやつだ。「しかし、君らみたいなエースを揃えて運が良いよ

「というか僕はエースなんですか？」

今まで思つていた事を口にした。

「いやそうでしょ。うちの隊に最後にきまつたからね。ボンウォンは、討伐数がトップ3。ローラーはアシスト数一位。湊は探索精度一位。」

こいつがつて感じだ。つていう田で、ボンウォンは見やがる。酷い奴だ。だが、ボンウォンがトップ3か…。んで、ローラーはアシスト。

『第2救助隊へ支援要請』

矢崎は、無線に了解。状況は？と返し、席を立つた。

任務か？ カツ丼の残りを食べる。しかしローラーは本当に小動物み

たいだ。

「どうかしました？」

「いや。ちょっとね」

僕は、カツ丼を食べ終えた。

いや。おいしかった。

「これから任務だ。」

矢崎は笑顔で言った。

26四月。（前書き）

冬休み終りであと、少し……。
やがて……間に合ひつ詰ない……。

矢崎は、僕とボンウォンを運転手に指名した。しかし、バイクツツウのは便利なもんだ。ちょちょいつと、戦場から拠点まで行き来できるからね。

「よし！ 戦闘員下車！ ボンウォンは、言ったポイントまで美作を誘導！」

僕は、バイクをボンウォンの近くで停車させ、ロレーナが降りたのを確認する。

「行くぞ」

ボンウォンはアクセルをまわし、加速して行く。僕も、続いてアクセルをまわした。

停車位置で、バイクを止めた。少し疲れた。

「…。」

今日は、すこし曇っているみたいで、星は見れないか。残念。僕は水を口に含み、乾きを潤す。なんとなく、寂しい。僕は、今更和夏が居ない悲しさに気付いた。

「お前つてさ。この隊に配属されとき、どうなのよ。」

「どうつて何が？」

「いや、言つてみれば。他の隊とは違つて救援じゃないか。今まで、言つてみれば新人教習隊つていう比較的戦線に近い位置で戦う隊から、討伐数を稼ぐ様な隊じやない所に配属された。言つてみれば、俺からすれば死にたいよ。」

「そうか？ 僕は、別に討伐対数を稼ぐ事に執着はないしな。この隊はこの隊なりに人は死ぬし、生存戦争の一部だと思うけど。」

「そんなこと言つて、討伐数はトップ10のくせに。」

「うちの隊は人がよく死ぬからね。仕方ないよ。必然的に狩らなきやつてなるからね」

僕は、支給品のタバコをポケットから出し、一本口にくわえる。

「吸うのか？奇遇だな。」

「いや、吸わないよ。」

そう言つて、僕は火をつけた。煙がのどを刺す。思わず、咳き込む。やつぱり、吸う物じゃないと思い。近くのコンクリート片の上に乗せた。

「どう？はまつたかな？」

「いや。一度と吸わないと言つたよ。」

「そうかい。それは残念」

そう言つと、ボンウォンはタバコを吸い始めた。するとどうだらう。見る見るうちにボンウォンの顔が艶めいて来た。不思議なもんだ。

『こちら、救助班。目標回収。おろしたポイントに10分後。』

『了解。』

僕は、無線のやり取りを終え、ボンウォンに伝え、エンジンをまわした。

「仕事か。」

「仕事。待つてゐやつが居るんだから」

僕は、エンジンのアクセルを2、3回まわす。ある程度あたためていないと緊急事態に対応できない。

「行くか。」

「先いけよ」

「行くとも」

そう言つて、ボンウォンはアクセルを思いつきまわした。少し、先に行かなくて言つ安⼼感を感じる。僕は、ボンウォンを追いかけるべく、アクセルをまわした。

バイクは、どんどんスピードを上げる。アクセルを捻つていれば当然だ。

すこし、さつきよりも地面ががたがたしている。

ブレーキを若干かけ、スピードを落とす。

「獣か？」

「急ごう」

とだけ返す。市街地に入った所で、アクセルをまわす。「あとどのくらいだ？」

「一分！」

そういうと、ボンウォンのバイクは更に加速した。正直、ボンウォンが乗ってるバイクの方が高性能である。まあ、正確には年式が新しいと言つべきか。

兎に角、ボンウォンは焦つてている。僕は、それほど焦つていない。けつして、焦つていな訳ではないが。

僕もアクセルを捻る。

回収地点に着く。

「到着！」

矢崎は、ケガ人をバイクにつけられた荷台に載せた。

「さっさと出るぞ。」

ロレーナが乗ったのを確認し、アクセルを再び捻った。

「負傷者は？」

「どうぞ。獣に喰われたらしく…」

僕は、バイクを止めた。矢崎は、救命隊に状況を説明している。

「…。お」

「おひ。久しぶり。」

僕は、手を上げた。

「…。元気かい？みんなとは」

「元気だよ。メリーコソ元氣？」

「まあ、そこそこだよ」

相変わらず、綺麗な髪の毛だ。そんな、エロジジイみたいな事を感じる。

「整備いくぞ」

「了解。すぐいく」

僕はボンウォンに手を振る。

「んじや。またね」

「…。また」

僕は自分の乗っていたバイクを倉庫へと押した。

「任務だ。小型の獣が西側隔壁付近に展開中。即座に対処しようと。」

「…討伐任務ですか？」

「そうだ。回収ついでにやつてこいと」

確かに近いかもしれないが。

「そうだな。お前等で行つてこい。俺は、ここでバイクの整備をしてのんびり待つてるから。」

「…マジですか？」

「マジマジ。ちょっとバイクの調子が悪いしね。」

…。思わず、僕はため息を吐いた。

「分かりました。向かいます。」

とロレーナは、バイクに戦闘には不必要的装備を置いた。

僕も、素早く要らない物を置く。戦闘で死にたくないし。出来るだけ、軽い方が動けるし。

「さて、やる気になつてくれた所で。みなとを中心に戦闘してね。そう言って、矢崎は軍手をはめ、既にバイクの整備を始めていた。

「了解。では行きます。」

僕は、ロレーナを確認して地面を蹴った。

「…。置いて行かれた…」

ボンウェイは小さくつぶやきあとから続いた。

一頭目の獣を斬る。久々に獣臭いと感じる。

「おらあ…！」

「あんまり、飛び出ないで。敵に囮まれる」

「結構居るぞ」

僕は、それだけ言つとぐ。正直、囮まれて死ぬ程度の奴じゃないだ

る。「それくらいなら、死んでる。

「『』ら！」

とボンウェイは次々と連撃を繰り出す。しかし、隙も大きいな。正直、あれだけ派手だとこっちは目立たなくてうれしい。探索に専念できるし。

「…。それが、ラスト。」

と僕は槍を首に投げた。

『任務終了。今から退きます。』

「5体か。」

「討伐数？それよりも、アシストの身にもなつてくださいよ。」

ロレーナはため息を吐く。まあ、陰でロレーナはかなり狩つてたしね。

「…お前は、何体だよ」

「4体よ。ホント、4体もしなきゃ行けないなんて…あるまじきよ

「…。みなど！お前は！」

「4体。」

僕は、水を飲んで言ひ。

「…。なんだよ。狩れてるのかよ。」

「後ろに逃してくれたしね」

僕は、笑いながら言ひ。面白いくらい、後ろへと獣が入つてくるし。

「…。もういいよ。俺は5体狩れた。一応、一番多い。」

「普通はもつと圧倒的じゃない？」

「そんなもん？」

「そうよ！」

「…。まあ、良いか。僕は、あぐびをしつつ、バイクへと走りだした。

向じゆり（前書き）

それとも、結末を頭で作りなこと終りせれないといひ悲劇に進みつ
つある今日。

向ひ

「…。ふう。」

修理を終え、エンジンをまわす。非常に快い音が鳴り、安心しエンジンを止める。

「…ひちは、終りましたよ。」

僕は、オイルまみれの軍手をとった。

「マジか…悪いが…こ…ひちはしばらくかかりそうだ。先行つてくれ」
僕は、部隊証と所属隊バッチをもつて旧強襲部隊支部に入っている司令部へと向かった。

やつぱり、和風な建物か。これは、何かで決められているのだろうか。

「部隊証を」

僕は、パツと部隊証を出す。

「美作副隊長ですね。どうぞ」

憲兵に案内される。「こちらです」

憲兵は一礼して、入り口へと戻つて行った。

会議室に入り、適当に座る。そして、部屋に置かれている。情報冊子を読む。

「…。お、久しぶりだね」

とさちさんは隣へと収まつた。

「お久しぶりです。」

「隊長?」

「え?」

「いや~。もう隊長になつたかなつて」

「こきなり、何をおっしゃいますか…。副隊長ですよ

「まじで、副隊長か!」

その反応にびっくりですよ。さちさん、即副隊長になつたらしいのに

「隊長はどうなの？」

「いい人ですよ。」

「しかし、言えない。戦つてる所を見た事ないし。」

「いやあ、そうだろうね。あの人は、ここに入つてから頭角を出したし。学校の時はマジで足手まといだったけどね」

「同じ学校なんですか」

「そりなんだよ。あいつと、あいつの彼女と僕と…あとは、衛生隊のゆりさんか。生き残つてるのはそんくらいだな。」

なにやら、うなづきまくっている。

「…。彼女?」

「そう、同じ隊にいない?」

「…居ない…あつ！」

そういうや、入院だつけ?そんな事を言つていたよな。

「入院してた様な…」

「入院? そうか」

少し、間が空く。僕は、その間に所属隊バッヂをつけた。

「ただいまより、第14回作戦会議を行う。戦闘小隊第1小隊長号令!」

「起立! 礼! 着席!」

「では、現状報告からだ。何か、前回と変わつた事がある隊。」

しかし、矢崎こないな…

「起立! 礼! 解散」

大体、1時間ぐらい。特に、異常もないらしい。超大型の獣の群れが居る意外はだが。

救助隊の倉庫に戻ると誰もいない。バイクは…一台ないか。
「みなど君。隊長は出撃するつて。」
「出撃?なんか、要請でも来たの?」
「救援要請だつて。」
「で、僕らは?」

「待機。明日に向けて書類をまとめとけだつて。」

「書類ね。はあ。」

報告書なんだろうな。この前の作戦の時のもなんか、未提出だぞつて今日言われたし。一体、どれだけの書類がたまつてるか不安だ。僕は、あまり使わないメガネをリュックから取り出した。

今日は、休日。貴重な休日。

…。何しようか。

僕は、する事もない。まあ、今まで食堂に居座ると言つ實に異議のない事をしていたけど、そんな事を一人でしても全く楽しくない。

ああ…何しよう。ホント何しようかな。

門は完成した。この僕がほんやりしていた昨日に実は完成したらし
い。

「…ついに撤退か…！」

「そう言う事になるな。そして、俺はお前等とは今日付でお別れっ
てことになる。まあ、原隊に復帰しても生き残れよ。」

「俺は、大丈夫だ。まあ、心配なのは湊だな。」

「それはない。あんたが一番心配だよ。」

「確かに」

ローレーナもうなづいてくれたのを確認し、ほっとする。

「それじゃ、列車に乗つて第2地上支部の軍用兼農業地に行くぞ。」

そう言って、矢崎は隔壁上路線に乗り込んだ。

久々に自分の家に戻つて来た。久々に入ると、色々な広告が無理矢
理押し込まれていた。

まあ、広告は適当にゴミ箱へと直行させた。地上支部市街はこれと
言つて変わらない。強いて言つなら、少し水道が改良されたかなつ
て言つくらい。

「みなどー」

懐かしい声が聞こえ、扉を素早く空けた。

「久々。」

「久々」

和夏はにこりと笑う。やつぱり可愛いなあ

「どうせ、『』飯食べに来たんだろ。」

「…うう~」

「今から、準備するので良いなら上がつて」

僕は、狭いキッチンへと向かつた。帰つてくる前に買い物をしてい

てよかつた。

素早く、簡単な物を作り僕らは食べていた。

「そういうや、佐々木さんたちがそろそろ来るつて。」

「でも、研究所立てる様な場所ないだろ」

「まあね。でも、なんとかなるとかなんとか…」

「…。一体どう言つ事だ。まあ、気にしないでおいひつ。佐々木さんは良いとして澄まし顔は好きじやないし。

「味噌汁うまくなつたね。」

「…。うかがな…多分、食堂の味噌汁がよつぽど口に合わなかつたんだね…」

「…。うかがも。あれば、茶色液体だつたし」

「…。」

「…。そこまではかつたか?…いや、僕はそつ言えれば味噌汁飲んでないじやん…。」

「メガネ?」

「ああ…撤退ギリギリまでデスクワークしてたし。外すの忘れてた」

「意外と似合つね。」

「…。」

何を…昔とは正反対の事を言つてくれた…。メガネ復活できる時が来るとは。やつと、目に負担がかかりにくくなる…。

メガネ? 気持ち悪い!! やめて!

この台詞で、昔傷ついた心が今になつて

意外と似合つね

…。大体10年間の痛みが消えた。

「…。どうしたの?」

「…感動してた。」

「…。」

…。仮異動期間終了の為、原隊へと復帰。

「…。」

「久々。」

「ですね。」

「新人は？」

「…。なんか、全員…」

さちさんは、第3小隊隊長から第1・3小隊隊長へと異動。それに合わせて、僕と和夏も異動になつた。

「うちの隊の任務は？」

「第3隔壁内の獣を狩る。基本的には、大体3～6日間野営して、目標頭数を討伐。」

「…。ハードですね。」

「そう？普通じゃない？」

「第1・2部隊はエース隊だし、そういつのやつたかもしれないけど救助隊は、1日展開ぐらいだしね。」

「まあ、それに向けて訓練に入るぞ」

「あと、3人は誰？」

「まあ、楽しみにしていてください。」

泊り獵（前書き）

冬休み最終日…。完結までは走ります。
…。とりあえず春までには終わらせねばなあ…。
分かりませんが。

泊り獵

市街地機動の訓練を行つた昨日。今日は、新しい人が誰かがくる。

「メガネ？」

「視力が低下しまして」

「まあ、能力的には使いまくるからね」

装備を確認してもらい、市街地機動訓練が始まった。

久々にこの動きはきつい。市街地機動訓練はかなり大変とは久々程怖いものはない。

訓練を終えて、荷物を降ろす。

「今日からしばらくなはこの訓練場に夜営する。」

「マジですか。」

「本当に冗談ぽいけど、任務なんだね」

きついな。これから任務に必要な事だからね。

「…。お」

「…。メリー！」

と和夏は素早くメリーに反応し、頭を撫でた。

「…。和夏元気だつたんだね。良かつた」

「メリーこそ元気で良かつた」

「しかし、いつも通りに髪の毛は少し乱れてるね」

ニヤリとメリーは少し笑い、髪の毛を撫で回す。

しかしさかの第3小隊のメンツが復活とは、予想外。

「明日から訓練だよ」

「…。了解」

さちさんは、ニコッと言つ。

あと一人か。

「今日から第3隔壁内45頭討伐任務を開始する。あと、補充兵士のカイルとゆりさんです！」

「…。ゆりさんってこの前話にでた御方。…和夏と違う美しいって行つた感じのお姉さんだ。カイルは？」

「僕は男には興味なし！」

「よろしく。足を引っ張らないように頑張ります」

「私は戦闘はそんなにだけアシストは得意なんで…よろしく

「んじゃ、出撃ね」

出撃ハツチから出る。すでに他の隊もかなり出撃している。さちさんは、他の隊が、戦闘をしているのをよそ目に旧市街地へと入った。「よし。今から狩ります。メリーハは僕と。和夏は湊と。カイルはゆりと。大体5時まで。5時になつたら連絡を入れる。散！」

僕は、和夏とアイコンタクトをとり市街地内へと入つた。

「どんな、獣が居るの？」

「…。それほど、脅威はないかな」

「了解。とりあえず、一番集まつている所まで連れて行って。」「はあ、飛ばすね。」

僕は、ため息まじりに言つて獣の群れへと向かう。

とりあえず、槍をつかんで対獣用刀も抜いておく。

僕は、獣の群れへとついた瞬間、一番手前の獣を首へと槍を放つた。

「支援頼むよ」

「…任せとき」

こう見ても、救助隊で暇な時はアシスト術をローラーから学んでいた。

和夏は、僕が投げた槍を引き抜き別の獣の首へと刺す。動きはかなり洗練されている。

獣は、全部雑魚。とは言え、獣。次々と首へと攻撃を叩き込む。

「…。とりあえず、付近に居ない」

「もう4時半かあ」

「さて、血液回収するかね。」「

僕は、注射器を使って、獣一匹一匹の血液を集めめる。言つて、見ればこれは獣を狩ったと言つ証明になる物だ。

「全部回収した？」

「今、終つた。」

僕は、ウエストバッグにしまい、和夏が高見の見物をしている建物へと駆け上がつた。

最近はあまり斬つていなかつたので腕が痛い。

「4時50分。ここで休憩しどうよ

「いいよ。」

僕は、屋根に座り用意していた紅茶を飲む。しかし、寒くなつたなあ。

「和夏は、寒くないの？」

和夏は、しばらく止まり

「寒いけど

「…。要りますか？」

素早く、紅茶を差し出す。和夏は、それをさつと飲み干した。
喉も乾いていましたか…。

『こちら、たちです。現在5時2分をもつて最小単位作戦行動を終了。各員、屋根の上に上がり。上がつた隊は報告。』

少し、ノイズが入つてゐる。意外とさちさんとは離れてゐるのかもしない。

『こちら、和夏、湊。屋根の上に上がりました。
無線機で報告をして、ぼんやり夕日を眺める。

「寒い。」

僕は、ウエストバッグから毛布を出し和夏にかぶせた。

『カイル、ゆり。状況終了。屋根の上に上がりました。』

『了解。今から、緑色信号弾をあげる。そこに集合してくれ。』

僕は、緑色信号弾を確認し最短ルート上に獣は居ないかを探索する。

『和夏行きましょうか。』

『この毛布良いね。ポンチョにもなる。』

「だしよ。まあ、安くはなかつたけど買つちやいまして。」

僕は、隣の建物へと飛び移り信号弾が上がった場所へと急ぐ。旧市街地は意外と、屋根が抜けていたりはしない。まあ、それはうちの支部の建設技術の良さだけではなく、経過年月が少ないからだろう。

「…。」

僕は槍を屋根の上に軽く滑らせ止まる。

「ここらかな。」

「そつみたいだよ。」

『和夏、湊田標付近に到着。』

『了解。こつちは確認している。そこで停止しておいてくれ迎えに行く。』

「お疲れ。」

とメリーハーは、僕の肩を暗闇から急に叩いた。

「うわああーーー！」

いや、当然でしょう。暗闇から、獣がなんて良くある。

「…。ごめん。」

「びっくりし過ぎだしょ」

「…すいません…」

ここまで、攻められるもんなんだ。

さつさと、今日使わしてもらう事になる建物へと入った。

「…。もともと、ホテルだった場所だよ。」

「やつぱり？設備がいいなつと思つたよ。」

「何頭狩れた？」

僕は、自分の集めた血液の数は5つ。

「5頭だね。」

「意外と狩れてるね。こつちは4頭。この感じなら大丈夫だね。予定期間の3日間で大丈夫そうだね。」

「さちさん。どうつすか？」

「飯？大丈夫。そこまでまずくない」

。誰も飯の事は聞いてない。が、意外と飯の情報は重要だ。モチベーションに深く関わる。

「只今、戻りました。」

「おつ、カイル悪いね。どうだつた？」

「特に、異常はないそうです。」

「それじゃ、飯を食べましょうか！」

さちさんは、うれしそうに言つた。

それじゃ、夜の行動の鉄則は、はぐれるな。という事で、この建物

の俺が指定した場所からは出ないよう。

僕は、装備の交換を行う。対獣用刀の刃と、血液回収用瓶。あとは、槍を昨日使った分を集める。

「しかし、研究素材となる物と俺等の扱いの差はいつもながら激しいね。」

「仕方ないです。僕らも研究対象ですけど、血液の方が鮮度が落ちますからね。」

ゆりさんは、さちの愚痴を聞いた。第3小隊では、みんながスルーする所だ。

一通りの準備を終え、さちさんから渡された食事を食べ。最初に決めていた出発時刻を待つ。

「さて、8時になりました。今日もこの場所へと帰つて来てください。」

「了解しました。」

「了解。」

僕は、和夏の装備を確認して僕の装備も確認してもらいつ。

「行きましょうか？」

「行こう。」

和夏は、先に出て行つた。

「それでは、出撃します。」

僕は、さちさんに聞こえるように言つてから、出た。

「さて…。今日はどの辺り?」

「…。場所は把握。今日も、楽な気になれないけど。位置が遠くてよく分からないね。」

「…まあ、速かれ遅かれ狩らなきや行けないし。いこうか」「行きましょうぞ」

僕は、素早く建物の上へと上がり獣が居ると感じた場所へ走った。

獣を大体、掃討した。と言つても僕らから500m範囲だけ。そして、昼食中。

「なんか、歯が抜かれたんじゃない。」

「ここは、そこまで強くない、子供の歯が集まっているのかな…猿にしても変なくらい弱いしね。」

しばし、沈黙2人で飯に集中。『飯とかいつても、高カロリーバーと、高ビタミンビーンズ。正直あまりおいしくはない。まあ、味よりも栄養を超重視した結果だ。』

「そういうや、救助隊つてどうだった？」

「う～ん…人が死ぬか生きるか分かるようになつたかな。」

ちょっとだけだけども。

「へえ…。」

そして、また沈黙。

『緊急連絡!』

無線によって沈黙は打ち破られるとは思つていなかつた。

撤収（前書き）

冬休みが過ぎました。
学校が始まりました。
頑張ります
。 。

まさかにも程がある。さちさんが負傷なんて。

『あどじのくらい?』

『5分は』

ちょっとばかし遠出してしまった自分を恨む。

「湊。前に集中。」

「…。ごめん」

和夏に指摘され、自分が想像以上に冷静でなくなっていると気付かされる。そうだ、戦闘時に冷静に入れるのは和夏より自分じゃないか。

「付近は?」

「…。入ろう。」

僕は素早く扉を開けた。

「…。みなとさん周りは?」

「異常はないかな。さちさんは?」

「大丈夫つてゆりさんは」

これを聴いて胸を撫で下ろした。和夏も良かつたあとへなへなと座つてしまつた。

「とりあえず奥に行きましょう」

カイルに急かされ、僕は和夏の起こし奥の部屋へと進んだ。

「さつきまで、連絡を取つていました。本部からの指示はさちさんを出撃ハツチへと帰還せよと。」

「帰還ですか…」

「本部の指示なんで…」

「いや。以外だなつて」

状況的にはいつもの判断なら、作戦続行だと思う。

隔離隔壁内の戦闘だからこそその判断か?よくわからない一般狩猟者には。

現状維持。これほど、現実逃避の言葉はない僕はそう思つてゐる。

「元気なら良いけど」

「まあ、獣化細胞の力を利用すれば、速攻で治るってわちさんは言つてるけどね」

獣化細胞の能力は實に良い物が多い。と言われている。が、この2世紀の間に獣化細胞の欠点だつて分かつてゐる。

獣化細胞は通常、10段階中の3~4の力を出しており、パニック時、非常に興奮した状態に5~6の力を出すようにされてゐる。10の力を昔は常時使つていたが、獣化細胞による暴走が始まるという事態が多発した。その為、狩猟者に獣化細胞のペースメーカーを着用させている。

傷の急速治療の場合は10段階中の7を出すらしい。

「…。シャワー行きませんか？」

「いいね。行きましょうか。」

カイルから誘われるとは思つても居なかつた。

「家に居てよ。」

「帰れたらね。」

和夏になぜか必要のない釘を打たれ、更衣室へと歩いた。

「そう言えば、湊さんはなんで狩猟者に？」

「まあ、計画の事情で。あとは、故郷の為かな？」

「そうですか。」

「カイルは？」

僕は、服を全て脱ぎ終えシャワーへと向かう。

「…。好きな女の子が居まして。」

「ホオ…戦う女の子ですか…」

「ですね。CMに映つた人のファンになつちやつて。」

「いいなあ。その動機。」

僕は、シャンプーを手に取り長い髪の毛を洗いまくる。そろそろ、髪の毛もキッチリ短く切りたい物だ。

「それで、猛勉強して第1訓練学校で主席で卒業して…。第1地上支部で教導期間とエースの称号をとつて、CMの女の子がこの支部にいるつて聞いて、この支部に配属願いを出して…。第6次中部仮説拠点越冬隊の第2次増援で配属されたんです。」

「CMかあ…どんなの？」

「あとで、見せますよ。」

水を強くして髪の毛の泡を洗い流す。

「久々つて気持ちいいですね。」

「そうですね」

撤収（後書き）

感想または誤字、意見があればください。
作品に大きく影響を及ぼします。
お願いします。

中華（前書き）

あんまり、本編に関係ありません。
まあ、魔が差したに近いですね。

今日は休日。珍しく、さちわんが、奢ると言つて出し街へと繰り出している。

「部隊証もつてるか?」

さちわんは、全員に聞いた。

「…はい。」

とメリー。

「大丈夫です。」

とカイル。

「珍しく入つてました。」

と僕。

「…。ないです。」

と和夏。

「…。まあ、大丈夫。仮証をとつてくるから。しばらく待つていてください。」

今日は、ゆりさんは遅れるとの事。まあ、元々救護班だから仕方ない。

僕は、それほど街に出た事はない。家からすぐ近くはよく買い物に出るが、言つてみれば、僕の家は地上の工業兼居住区。正直言つて、今居る、商業区とは賑やかさの格が違う。

「おいしい物が多いですね」

とカイルはむっちゃ何かを食べている。それは、第2支部名物のあんこころ餅ぜんざい。超甘党の僕一押しの一品。ちなみに食堂でも食べれる。ほかにも、キャラベルローリング、たいやき、とか第2支部ならどこでも売つてる物をいっぱいもつている。

「あんこころ餅ぜんざいは確かにおいしい。一番、おいしそうで聞いたのはおしる小ちゃんとか言う店らしいよ。」

ちなみに、僕はまだ行けていない。そして、すぐ行つてみたい。

「…。いつの間にそんな情報を？」「

メリーは少しにやつとして、僕を見る。

「趣味ざまス。」

「…。そうザマですか

メリーとはよくこんな事になるな…。

「お待たせ、行くぞ」

さちさんは、和夏に仮証を渡し、地下行きエレベーター乗り場へと向かった。

エレベーターに乗り込むと地下衛兵は電源を入れた。

「しかし、第2支部の地下はどうなんですか？」

「う~ん。かもなく不可もなく。普通ぐらいの設備だけ、旧地下鉄からの獸の侵入が多いんだよね。」

さちさんは、少し遠い目をする。

「まあ、おいしい店は知ってるよ。」

そつ付け加え、ため息を吐いた。

「…。中華料理おいしい。」

メリーの言葉に僕と和夏はうなずいた。本当においしい。

「辛い。」

カイルは、水をかなり飲んでる。辛い物はよっぽど苦手らしい。

今日は、地下に来てよかつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3296z/>

Rebellion to Jupiter

2012年1月14日21時47分発行